

傾城不問語

香川 莉歩子

第一部 八しほの事

一.

ばたばたと駆ける足音。騒々しい呼び声。それらが階段の方から上がってきたかと思うと、とめ夜達のいる座敷の前でびたりと止まった。

「花魁、床夜花魁、いるかい」

「あい」

忙しい呼びかけに、隣に座る花魁が短く返事をすする。さつと音を立てて開いたふすまの向こうに立っていたのはやはり、この見世の遣り手婆のお香で。

「とめ夜と、たよりと……お前達だけかい。もとめはとうした」

「さて……今朝は見ちゃおりんせんが」

「わっちも知りんせん」

「湯殿にもおっせんした」

睨みつけるような目のお香に、花魁は小首を傾げて答える。それを見たとめ夜は、花魁とは反対側へ首を傾けて、やはり同じようにお香へと答える。隣に座っている朋輩のたよりも同様に。それを見たお香は眉間に深い縦皺を寄せて、額に手を当てながら、そうかい、と溜息を吐いた。

「実は、さつきから姿が見えないんだよ。あいつの姿が見えない時は大概ろくなことがない。また足抜けでも企んでいるんだと厄介だ、とめ夜、たより、お前達も捜しな」

言われ、まずとめ夜が思ったのは、面倒だ、ということとであった。そんな事は見世の若衆がすれば良い。捕方つかたの真似事など、自分達の仕事ではない。

「……花魁、良うざんすか」

「仕方ねえの、行つてきなんし。どうせすぐ見つかる、わっちの手紙もそれまでには書き終えていよう」

花魁が駄目と一声言つてさえくれれば免れたものを、はあ、と小さく肩をすくめた花魁は困つたように笑う。しかしもとめも、とめ夜達と同じ床夜の妹分の一人だ。それを捜すのに手を貸したくない等と、遣り手相手に言うことなど出来ないのだろう。とめ夜は諦め、たよりと領き合つて立ち上がった。

湯殿と厠、それに大広間をもう一度見て回つてくれとお香に言われ、二手に分かれて見世の内を駆け回る。時折、行きずりの朋輩や先輩女郎にもとめを見なかつたと問うも、望む答えは得られない。すぐに戻つてきたたよりも、首を横に振つていた。

仕方なしに、見世の入り口近くに位置する部屋、内証ないしょうへと向かう。お香は外へ捜しに行つてしまつたから、普段そこに詰めているはずの見世の主に、代わりに知らせて行こうと思つた為だ。しかし覗いてみると、そこにはたつた今まで自分達が捜していたはずの、もとめの姿があつた。

「どうしたとめ夜、たより。もとめに用なら後にしてくれ」

振り向きざまにそうつっけんどんな態度で言つたのは

この見世の主、桐屋きりやごろうざえもん五郎左衛門。仁、義、礼、智、信、忠、孝、悌、の八つの徳を忘れた者という意味で、妓楼の楼主はまたの名を忘八ぼうはちとか亡八わうはちとかいうが、彼も他の楼主同様、その二つ名が相応しい男だ。もとめは麻縄じばでふん縛られ、髪を振り乱しながら部屋の実真中でびたんびたんとたうち回っている。その彼女を腕にひっかけ傷をこしらえた見世番が担ぎ、行灯部屋の方へと運んでいくのを見て、思わず顔が引きつった。

「お……お香さんに言われて、もとめを捜しておりんした。見つかったのなら用はありせん……」

「ああそうか、そりゃご苦労だった。お香は今若衆が呼び戻しに行つてゐる、お前達が来たことは私から言つておくからもう戻つていいぞ」

もとめがこの後受けるであろう折檻を思うと夏も近いというのに肌が粟立つ。追い払われるようにして内証を背にし、たよりと連れ立って床夜の部屋へ戻ると、先刻言つていた通り、彼女は文を書き終えていた。

「花魁、戻りんした」

「早かつたのう。何じゃ、もとめはもうとつ捕まつたか」

「あい……行灯部屋の方へ連れていかれておりんした……」

「はは、そうかそうか。二人ともご苦労じゃつたの。苦

勞ついでにとめ夜、この文、出してきてくりやれ」

「あいー」

ぴっと寄越された文を受け取り、踵を返す。

とめ夜やもとめ夜のように幼くて客を取れない
 「禿^{かむろ}」、もしくは、「新造^{しんぞう}」として客は取り始めたもののまだ自分の口に糊するほどには至っていない者は、皆誰かしら先輩女郎の妹分となつて、日々の生活を世話してもらうのが通例である。着物を揃えてもらつたり、女郎としてのお披露目である「新造出し」の際のかかりを工面してもらつたり、或いは女郎としての技や心構えを教わつたり。その代わり普段はこうしてこき使われる。禿の中には姉女郎の使い走りをするのを渋る者も少なくないが、とめ夜を始めとして、床夜の禿は他所の禿よりも聞き分けがよいと評判だつた。床夜は駄賃代わりにおやつをくれるし、よく饅頭などを食べに連れていってくれる。何より、頼み方が柔らかい。使われる方も気分よく使われてやれるというものである。

さつき上つてきたばかりの階段へもう一度向かう。ばたばたと階段を駆け下りると、内証の手前には、顔を真っ赤にしたお香と、そんな彼女から素知らぬ顔で目をそらしている、見知つた顔があつた。

「おや、とめ夜かい。さつきはご苦労だつたね」

こちらに気がついた遣り手が、汗をぬぐいつつねぎら

いを与える。だがとめ夜の目は、その隣に立つ、やはり床夜の妹女郎である振袖新造の方に半は奪われていて。

「……もしや、八しほ姐さんも逃げようとしていんしたか」

「いんや。待合の辻の辺りを、ちと見て回つておつただけよ」

恐る恐る問うと八しほはあつげらかんとそう答える。それを聞いたお香の目がつり上がつて、彼女は鼻息荒くまくしたて始めた。

「何が見て回つていただけ、だ。どうせ抜ける算段をしていたんだろう。大体ね、自分の頭をいくら使つたところで足抜けなんて出来るはずがないって分らないところがお前は馬鹿なんだ。器量は決して悪かないんだから、もうちつと思慮深さつてものを身につけりゃ花魁だつて夢じゃなかつたかもしれないのに、どうしてこう考えが浅はかなんだか……」

「……あのう、わっちゃあ花魁の文を届けるよう言付かつていんすりやあ、もう行つて良うありんすか」

その話はもう十回以上聞いた。内心うんざりしたとめ夜は花魁の文を遣り手に示し、内証を後にすると、すれ違いざま八しほに、お香の愚痴は長いからのう、と同情を囁かれる。だがそれが遣り手の地獄耳に入らない訳がなくて。またがみがみと怒鳴るお香の声を聞きながら、

他人事のように何を言っているのだからとわずかながら呆れを覚えた。

二.

日本橋から一里半。浅草御門を抜け、御倉の前を通り過ぎ、雷門から浅草寺を経て、日本堤に出た先。浅草の田んぼの真ん中に、この地は位置している。間口は百八十間、奥行きは百三十五間の長四角。客が北枕にならぬよう、四隅は東西南北を向いている。敷地は広いが出入り口は黒塗りの冠木門ただひとつ。その大門の脇には四郎兵衛会所が構え、周りはぐるりと一面、幅五間のお歯黒どぶで囲まれており、中の遊女達の逃亡を阻む。男達が心躍らせる華胥の国。町娘も溜息を漏らす無何有の郷。

それがここ、吉原という地であった。

「もとめ、またこつびどくやられんしたな」

広い吉原でも一段格式の高い見世が立ち並ぶ、江戸町二丁目。とめ夜が暮らしているこの桐屋も、そこに居並ぶ大見世のひとつだ。その一階にある湯殿で朝風呂に入っていたとめ夜は、後から入ってきたもとめを見て、呆れた声を上げた。

「聞きんしたえ、お前え、夕べも抜けようとしんしたな。いい加減に諦めなんし」

「これが抜け出さずにおらりようものか。あの親父、わつちを来月にも張見世に出すと言っておった。誰が客なんぞ取るものか、今のうちに出ていつてやる」

諷める言葉をまるで無視して一向に懲りた様子のない朋輩に、肩を落とす。もとめが近く見世に出されることは知らなかったが、彼女が足抜けを試みているのは、この見世に売られてきたその日からのことだ。簀巻きにされた朋輩が庭の松に吊るされているのを朝っぱらから目の当たりにする羽目になったこちらの気持ちも、少しは考えてほしいと思う。

「……ここあそこまで悪いとこかの。飯も食えるし湯にも入れる。年季が明けりゃあ出てもいいける。出ていきたくなけりゃ残つてもいい。病を得るのが嫌と言うても、大門の外とていくらか災難はあろう。お前えは一体何がそう嫌で、足抜けを企みんすか」

「何が嫌ときたか。近く引つ込みになるお前えにや分かるまいて。花魁の位が約束されたお前えには。わつちも早えこと仕込まれていりゃあ、花魁にだってなれたはずじゃ。なのにあの目暗親父、ろくに仕込みもせず見世に出すなんぞ、馬鹿にしおって……こんな見世、こつちから願ひ下げじゃ」

声を荒げるもとめの言に、そつと溜息を吐きながら湯船へと浸かる。成程、自分が見世の主人に目をかけられ

ているのは事実である。花魁の器と見込まれ、茶道、華道、歌舞音曲など、お大尽の相手をする遊女に求められる素養を仕込まれる「引っ込み禿」になることが決まっている。しかしとめ夜から見て、たといもとめが引っ込みと同じ稽古を受けたとしても、彼女が将来花魁になれる器だとは到底思えなかつた。そもそも聞くところによれば、もとめも元は小金持ちの商人の一人娘だつたらしい。ならばここに来るまでに手習いや三味線くらいは習つていたはずなのに、試しに聞かせてみると言つた主人の前で彼女が披露した端唄は見事に調子つ外れだつたし、手習いも瀕死のミミズがのたうち回つたような筆跡だつたのを、とめ夜は知つている。

そしてまた、きつともとめは知らない。今この見世を背負つて立つ床夜の、次の代の看板花魁として目される重圧がどれほどのものであるかを。懂れでなりたがつてゐるもとめなどには想像もつかないであらう覚悟を決めて臨む自分だからこそ耐えられる、針の筵にも似た期待の眼差しを。

「花魁、のう……もとめ、お前えは花魁になりたかつたのかえ」

「八しほ姐さん……」

不意に背後から声がかかる。いつからそこにいたのか、もとめと並んでこの見世の厄介者である振新は、い

つものようにくつたくなく笑いながら湯船の縁に寄りかかつていた。

「なりたかつたか、じゃと。今からでもわつちはなれるわ」

「そういう意味じゃあなくての……もとめ。お前え、なにゆえ花魁になりたい」

「は……」

なにゆえ。そう問われ、こちらを振り向いてきたもとめと思わず顔を見合せてしまう。

「言うておくがの、もとめ。花魁になりやあ廓を出られると思ふとるなら、そりやあ間違ひじや。床夜花魁を見てみなんし。器量も学もあるのに、身請けの話は聞かなかろう。そりや何故か」

「ずい、と身を乗り出してきた八しほに、とめ夜ももとめも思はず身を引く。」

「花魁になりやあ、豪華な仕掛けや、立派な筆筒を用意せにやならん。妹も持たねばならん。それも、付廻しや屋三になれば一人や二人では済まんぞ。分かるかもとめ、花魁はの、そりやあ金がかかるんじや」

それは確かに、ととめ夜は小さく数度うなづく。床夜は客から巻き上げられる金子も多いが、身の回りのことにも同じくらい金をかけている。暮れには馴染みの客に無心の文を書くくらいだ。

「無論お大尽に身請けされる機会も、新造よりは多からうて。じゃがの、お前えみてえな、半人前の留袖新造の面倒を見にゃならんのも花魁の宿命じゃ。それをせなんだら、情の薄い女と噂が立ち、客足も遠のく。どうせなるなら花魁にと思ってお前えの気持ちも分かるが、花魁だけが女郎じゃあねえ。床夜姐さんみてえな面倒見のいい姐さんについて留新をできることは、感謝しなんし」

ほう、ととめ夜は思わず嘆息した。正直なところ、八しほがこれほど物を考えているとは思っていなかったから。しかしもとめはそのようには思わなかったようで、その生来の苛烈さがよく見てとれるご面相を更にきついものにして、囁みつくように吠えた。

「うるさい。わっちゃあまだ禿じゃ、留新になんぞなつとらん。何じゃ、花魁になるなと言うなら、とつとこんな廓出ていつてやるわ。廓でなくともお大尽に見初められる術なぞいくらでもある、お前えらはそこで指くわえて見ているがよい」

言い終わるが早いのか、もとめはざばりと立ち上がりすたすたと湯殿から出ていく。一体今の話のどこを聞いていたのかと唾然としてみると、八しほはやはりからからと笑って、もとめには難しかったかの、と肩をすくめてみせた。

三:

「なに。わっちがなにゆえ花魁になったか、じゃと」

「あい」

夜見世も近い刻限。支度を済ませたとめ夜は、今朝からずつと気がかりだったそれを姉に聞いてみた。床夜は何度か瞬きをすると、すいと目を伏せ、ふむ、と考え込む。

「……姉が花魁だったから。花魁が一等稼げるから。しかし何よりも、周りに祭り上げられたから、というのが実のところであろうな」

「祭り上げられた……」

「そうじゃ。桐屋が大見世を名乗り、この二丁目で大きい顔をし続ける為には、道中を張れる花魁が要る。そしてたまたまわっちの代に、他に適当な者がおらんかった。故にわっちに白羽の矢が立ったという訳じゃ」

「では、では姐さんは、花魁になりたくはなかったのではありませんか」

「思わず身を乗り出して問う。床夜は少し肩をすくめ、そうさなあ、と宙を仰いだ。」

「お前えはなりたくねえか。花魁」

「わっち……わっちは……なれるなら、なりとうありません」

「じゃろう。わっちも、なれるものならなりたかったか

ら、これ幸いとその神輿に乗った。そんなところじゃ。まあ悔いてはおらんよ」

はあ、ととめ夜は曖昧に頷く。しかしなにゆえそのようなことを聞く、と床夜が問うてくるので、実は今朝、と湯殿でのことを話すと、床夜はくつくつと笑った。

「はは、八しほお前え、そんな事を言うたのか。知った風な口を利きおつて」

「しかしその通りでありんしょう」

少しばかり拗ねたように口答えする八しほ。もとめは部屋の間で未だに膨れている。

「……もとめ。引つ込みになれず悔しかったか。それで抜けてえか」

床夜は少しだけいざり寄つて問う。もとめはぐつと膝に顔を埋めて返事をしない。

「まあ、最中の月でもお食べ。最後のひとつじゃがの」
「あつ、ずるい」

慰めるかと思いきや、床夜は最中を出して与えた。もとめは寸の間睨むような目つきをしたが、すぐさま最中を奪うようにして口に詰め込む。ずるいずるいと騒ぐ他の禿や新造に、お前えらにも昼間やつたじやろうと床夜は苦笑するばかりだった。

「……なあ、もとめ。わつちには、お前えを花魁にしてやることも、廓の外へ出してやることも能わぬ。できる

ことと言えば、腹が減って気持ちさがさくれぬよう、こうして菓子をやることくらいよ」

「……じゃが、とめ夜が花魁になれるよう、手は貸すのでありんしょう」

突然矛先が己に向き、思わず背筋を伸ばす。ふむ、と床夜はこちらを見て、すぐまたもとめに視線を戻した。

「ああ、貸す。しかし貸すだけじゃ。ならせてやることはできぬ。お前えにも同じじゃ、もとめ。お前えが無事に一本立ちできるよう、わつちは金も骨身も惜しまん」

花魁になれるかは、最後は本人の才次第。それはとめ夜にはあるがお前にはない。そう言われているようにも聞こえかねず、僅かにもとめを哀れに思ったが、もとめはもう嘯みつくこともなく、押し黙っていた。それで座敷もしんと静まり返り、下から張見世に出ている遊女達の客引きの音が聞こえる。それから、誰かが階段を上ってくる音。とめ夜が首をめぐらせると、見世番の男が顔を出す。

「花魁、越前屋の旦那がおいでです。道中の支度を」

それを受け、ゆくぞ、と立ち上がる床夜に従って外へ出る。越前屋と言えば、最近床夜と馴染みになった大店の旦那様だ。付き合いは短いが、とめ夜の目にも彼は他とは一段男ぶりが違つて映っていた。なにせ初回の翌日、床夜が「昨日のはどう思う」と聞いてきたくらいで

ある。これまでにそんなことを聞かれたことはなかったから、あれは恐らく、自分の男を見る目を試す為に来てきたのだと、とめ夜は思っている。そして床夜がそんなことを聞いてきただけあって、越前屋は遊び方も風流で、また間を空けずに足繁く通ってくる、花も実もある粋な男であった。

その彼が来ているというのであれば自分も気合いを入れて道中に臨まねばなるまいと、とめ夜は気を引き締める。

「今宵は良い月じゃの。越前屋の仁様がおいでになるには相応しい日和じゃ」

「あい、花魁」

小さく囁かれ、とめ夜は支度を済ませた姉を見上げる。頬を染めて楽しそうに笑む床夜は今日も今日とて匂い立つような美しさで、まさしく百花の魁のごとき人だと、同じ女のとめ夜でさえも思う。髪を飾る筈こまがひは仏様の背負う後光のようだし、実際大層情け深い性をしているし、こんな苦界にいるのが不思議でならない。こんな人は、もっと高貴な生まれで然るべきなのではあるまいか。ちよつとやそつとでは落ちぶれるようなことのない、例えば公家の姫君とか、將軍家のご息女とか、そんな殿上人の身分が、この人には相応しい。こんな、火事で焼け落ちてしまうような狭い檻ではなくて。

——こんな所、私がいるべき所ではないわ
耳の奥に声が落ちて、こめかみの辺りがちりつと痛んだ。不快さに思わず顔をしかめ、すぐさまぐりぐりと指でこめかみをもみほぐす。長らく忘れていた声には苛立ちしか募らない。溜息を押し殺し、心の中で言い返した。

——この人はあなたとは違うよ、おっかささん。

器量も、学も、何もかも。尻に敷いていた夫に死なれ、跡取り様だと猫かわいがりしていた息子に先立たれ、残された娘と二人で生きていかねばならなくなった時にあの人は、自分は汗水垂らして働くのは嫌だとのたまった。火事で焼け出された他の者がまた生活を立て直そうと動く中、辛うじて借りられた長屋に引きこもって、もはや亡い男達の名ばかり呼んで過ごした。あの愚かしい箱入り娘と、その身ひとつで皆を食わせている床夜を、どうして比べられようか。自分はその女のようにはならない。男に寄り掛かるばかりで己では立てなかった母のように。そう思つて奥歯を噛みしめると、つん、と頬が突かれた。

「これ、とめ夜。紅が落ちんす。仁様に、紅の落ちた顔で会う気かえ」

「あ……」

腰を屈めた床夜の顔がすぐそこにあつて、思わず身を

引く。言われたことに気づき、もしや唇を噛んでいたかと唇同士をすり合わせる、花魁は眉尻を下げてくつくつと笑った。

「嘘じゃ。紅は落ちとりやあせんが、口の下が梅干しの種が如く皺になっておった。何ぞ悩みでもあるなら後で聞こう。今は道中じゃ。ほれとめ夜、ゆけ」

道中は、禿が先を行くことになっている。花魁は肩貸しの男と共に、後ろを悠々と歩くのが習わしだ。ゆえにとめ夜は、道中をこなす床夜の姿を見られない。しかし桐屋に来たばかりの数年前、床夜がまだ新造になりたてだった頃、当時の彼女の姉女郎の道中に並んでいる姿から見たことがある。食い入るように見たあの光景は、今もとめ夜の臉の裏に強く焼き付いている。前を歩く花魁に負けず劣らず、しゃんとして付き従う後ろ姿。帰ってきた彼女にすぐさま、妹にしてくれと頼んだら、お香に頭を叩かれたものだ。

あの人の前を、今、自分は歩いている。とめ夜は少し、背筋を伸ばした。

「おお、床夜。待ちかねたよ」

満面の笑みで床夜を迎える越前屋。目尻の皺でようやく彼が不惑をとうに超えていると思ひ出せるような、子供のようなその無邪気な笑顔は、床夜の隣に並ぶのに遜色ない。

越前屋が上座に、床夜は下座に陣取る。馴染み客なのだから当然のことだが、これだけは何となく納得のいかないとめ夜である。初回、上座にしっかりと座っている作り物のような姿こそ、床夜はもつとも美しい。あの姿を見たからこそ客達は早く馴染みとなって得たいと思うのだから、そんなのは野暮だ。飾られたひな人形は、わんぱく坊主が泥遊びをした手で触っていいものではない。まして酒を飲ませて手籠めにするだなんて、そんなに飲みたいのなら右大臣相手にでも飲んでいればいいのだ。床夜姐さんに手を出すな。越前屋にさえその思いが湧くのだから、自分も大概姉馬鹿だ、ととめ夜は顔だけすまして内心そんなことを考えていた。

「花魁、ちよいと……」

遠慮がちに襖が開き、床夜に声がかかる。床夜をご指名の他の客が来たのであろう。越前屋は割に上客だが、床夜の客の中では新参者の方である。相手によっては、越前屋を置いて、そちらに顔を出した方がいい場合もある。それを思っつか、越前屋はほんの僅かに眉をひそめたが、床夜は首を巡らせると、八しほ、と穏やかに呼びかけた。

「名代みやうだひでありんすか……」

「良うおつとめなんし」

どこか歯切れの悪い八しほに、床夜にしては有無を言

わせない口調ではつきりと告げているのを見て、とめ夜は小首を傾げる。そしてちらと越前屋の方を見れば、目尻を下げて、下弦の月のような弧を描こうと戦慄しているらしい唇を何とか一文字に引き結んでいる。行かなくていいのかい、とても聞きたいのだろう、そわそわと物言いたげな目つきで床夜を見てはぐっと堪えているように、何とも落着きがない。その様子があまりにおかしくて、とめ夜が耐えきれずにくっと喉を鳴らすと、それが引き金となったのかどっと座敷が沸いた。いい年をした大の男が紅梅のように顔を赤くし、照れ隠しであろう、ぐいと手元の杯を空にする。その仕草もどこか滑稽で、たよりと二人けたけたと笑っていると、名代に行かねばならないはずの八しほが襖を閉める途中で手を止め、顔を歪めてこちらを見ているのに気がついた。その襖を掴んだ指の白いのを見てとめ夜はようやく、あれ、と瞬きを繰り返した。

四

八しほが振袖新造になれたのは、氣立てと笑顔と床夜のお陰だと、聞いたことがある。まず相手の話をよく聞いてしっかりと相槌を打つ。それでよく笑う。そして素直な性質が床夜に気に入られ、囲碁や将棋は不得手だが、端唄なんぞをよく仕込まれた。夜見世の清搔も上手

くて、三味線の竿さばきを見た素見がたまに喉を鳴らしているらしい。

とめ夜がこれらを誰に聞いたかと言えば、八しほ本人である。お互い花魁には頭が上がりたくないよねえと笑っていた八しほ。その彼女が今、こともあろうにその恩人であるはずの床夜にむかって、鬼のような形相で罵声を吐いていた。

「姐さん、あんた知っていてわつちを名代にしんな。この薄情者」

「薄情とはなんだい八しほ、お前床夜にどれだけの恩があると思ってるんだい」

八しほは床夜に食ってかかっているが、それに嘔みつき返しているのは床夜ではなく遣り手婆のお香である。床夜なら八しほ程度に口で負けるはずもなろうが、喧嘩を好まない彼女が言われっぱなしになっているのを見かねてといったところだろうか。床夜自身は堪えている様子は無いが、こういう時に怒鳴り散らすのが好きなのが桐屋の遣り手である。

「お前が今この桐屋で振新なんてご身分でいられてのは誰のお陰か言ってみな。床夜がいなけりやお前は今頃一発何文かの鉄砲女郎だよ。それをそんな綺麗なべべさせてもらって立派なお座敷にも呼んでもらって……新造出しの金子だってみんなこの床夜姐さんに用立ててもら

ったもんだらう。突き出しの客の面倒も見てもらうつてのに、お前、よくそんな口がきけたもんだね」

「てめえとは話してねえよ。おい床夜、こんなお婆の後ろに隠れてねえで出てきやがれ」

「いい加減にしな八しほ、それ以上言うようなら……」

「お香」

ふと、静かな声が割って入る。辺りがびしゃりと水を打ったように静かになる。障子の陰から様子を窺っていた遊女達の息を飲む音が、とめ夜の耳にも聞こえた気がした。

いつか聞いた噂が確かなら、遣り手は昔、床夜の姉貴分の朋輩だったはず。いくら相手がこの見世の看板女郎だからといって、我が子ほど年下の小娘に名で呼ばれたくらいでひるむ必要もないはずなのに、そのたった一言で、床夜は黙らせてしまった。

「言いてえことがあるんなら、言ってもらった方が助かりんす。……それで八しほ、わっちが何を知っていて、お前えを名代にしたつて」

そう言つて八しほに水を向けるが、一緒に飲まれてしまった八しほは咄嗟に言葉が出てこないらしく、さっきの威勢の良さを失つてしまっている。だがじわじわと何に腹を立てていたのか思い出したのか、徐々に肩をいかにせ、再び顔を赤くしてましく立って始めた。

「とぼけるんじゃねえ。仁兵衛様のことだよ、分かってんだらう。わっち以外にも名代に立てられる新造はいたのに、わざわざわっちを選んだのは、わっちを座敷から、仁兵衛様から遠ざけたかったからなんだらう」

「……」

床夜は答えない。お香も口を挟まない。とめ夜はただ呆れて、ぽかんと八しほを眺める。

気立てがよく、愛嬌があり、芸にも秀でている八しほが、花魁は難しいと危ぶまれている理由。それがこれだった。よく言えば真つ正直、悪く言えば考えなしなところ。言にしる動にしる、思った通りにすぐ動いてしまうところは、客との駆け引きを必要とする遊女にとって命取りになりかねない。

「八しほ」

眼を血走らせてわめく妹女郎の息が上がったのを見計らったのか、八しほの言葉が切れた時に床夜が口を開いた。とめ夜からは床夜の背しか見えず、今床夜がどんな顔をしているのかをそこから読み取ることはできない。

「そこまで分かるんなら、残りも自分で考えなんし。なにゆえわっちがお前えを仁様から遠ざけたか。分からねえようなら、わっちもこれ以上面倒は見きれんせん」

それだけ言つと、床夜はもう口を開くことはなかった。わなわなと震えた八しほは、むしろいつそ泣きそう

に顔をゆがめて、何か激しく床夜をなじると、ぱつと背を向けて部屋を出ていく。野次馬の遊女達は勢いよく左右に分かれて八しほの通る道を作ったが、その腫物に触るような皆の動きも気に障ったのか、大きく舌打ちをすると、彼女は足音を立てて階段を下りていった。それを目で追い、お香がひとつ鼻を鳴らす。そうしてやはり遊女達の間を通って下へ降りていくと、皆は見せ物が終わったかのように肩を下してちりぢりに自分達の部屋へ戻っていく。後には、床夜ととめ夜だけが残された。

「……八しほはあれがいかんのう」

溜息を吐くような床夜の声。とめ夜は思わずどきりとするが、くると振り返った床夜は、いつものように穏やかな顔で笑っていた。

「姉の客に惚れたのなんのと、それも遣り手の前で怒鳴りおった。あれがなけりゃ、さっさと突き出しの客を見繕って、見世に出してやれたものを」

どんな顔をしているか思っていたのか自分でも分からないが、それを見てとめ夜はどこかほっとする。ずりずりといざり寄り、床夜の傍らへと身を乗り出した。

「花魁は、八しほ姐さんが仁様に懸想していることに気づいていんしたのか」

「そりゃあの。言うたろう、『昨日のはどう思う』と。あの子は初回から仁様に一目ぼれだったからの」

え、ととめ夜は声を上げる。あれは八しほのことだったのか。道理でとめ夜が「上客だと思いんす」と答えた後、愉快そうにくつくつと笑っていた訳だ。

「言うておくが、仁様は然程の男ではないぞ。金は落とすしてくれるし心根も悪かないが、こつちが惚れ込んでやるにはもう一步踏み越えてくるものがない」

床夜のあまりの言い様に、とめ夜は開いた口がふさがらなかつた。あんな風に頬を染めておきながら、越前屋のことをそんな風に思っていたなんて。まさか今までの客もそんな風に値踏みしていたのだろうか。とめ夜が物も言えずに啞然としてみると、思いのほかしたたかだった姉女郎はふと目を細めた。

「……良う見ておきなんし、とめ夜。恋した者の眼は男も女も変わらん。あの、身を焦がす螢のような眼差しをしてくる客がいたら、刺されるかも身の周りに用心せよ」

「……八しほ姐さんも、花魁を刺しんすか」

言われていることの意味は分かった上で、とめ夜はそう問う。床夜はひとつ瞬きし、ふむ、と目をそらした。

「……人けのない所でわつちを刺すのなら、その方が良いやもしれぬ」

ひゅつと息を飲んだ。

思わず身を引く。傍らに手をつく。胸が早鐘を打つ

が、床夜の顔から目がそらせない。知らず知らずのうち
に袖を握りしめていたようで、ふとこちらの手元を見た
床夜は困ったように笑み、そつととめ夜の指を一本一本
解いた。

「そんな顔をするな。刺されてなぞやらぬゆえ」

違う。違うそうじゃない。わつちが怖かったのは。わ
つちが怯えたのは。

そう思うが、握ってきた床夜の手がひんやりとなめら
かで、振りほどくこともできず。

「団子でも食べに行くか。他の子も呼んできなんし」

いつものように笑うものだから、もしやあれは見間違
いだったのかもと思ひ直して、他の禿や新造を捜しに部
屋を飛び出す。しかし八しほ以外の新造やたよりはいた
が、何故だかもとめは見つからなかった。

「仕方ないのう……ま、もとめには土産を買ってやれば
よかる。さ、行きんすえ」

床夜がそう言ってしまうえば、それ以上捜すこともでき
なくて。皆で揃って茶屋へ行き、花魁の奢りの団子を頬
張って、のんびり茶を飲んでから帰った。

「もとめを見かけたら渡しておくれ」

預けられた団子を手にもう一度見世を捜し回る。屋
八つが近づいている刻限で、髪を結ったり化粧をしたり
と女郎達は慌ただし。もとめを見なかったかと誰かに

問うのも憚られて、一人二階の廊下をうろうろしている
と、庭の松の陰に誰かがいるのが見えた。

「もとめ、そこにいんしたか」

ようやく見つけた喜びで声を上げ、急いで庭へ下りて
いく。駆け寄るともとめは何やら目を見開いて身を引い
たが、とめ夜はすぐさま団子をずいと差し出した。

「ほれ、土産じゃ。後で姐さんに礼を言っておきなん
し」

「あ、ああ……」

どきまぎしているのは、土産があると思っていなかつ
たからか。いつもなら甘味を見れば飛びついてくるも
とめが、受け取った包みからも、とめ夜からも目をそらし
ている。

「どうした、もとめ。嬉しゅうありませんのか」

「いっ、いや……あ、後で大事に食べんす」

「もとめ」

不意に声がして、振り返る。どこから現れたのか、縁
側に立っていたのは八しほだった。

「苦勞じゃったの。ほれ、駄賃じゃ」

言いながら庭に下りてきた八しほはもとめに何文か小
錢を握らせる。瞬きをしつつそれを見ていたとめ夜だつ
たが、はたと気づいて、風呂敷包みを抱えて立ち去ろう
とする八しほを呼び止めた。

「姐さん、花魁が団子を買ってくれんした。姐さんの分もありんす、後で花魁のここに行つておくんなんし」

そう告げると、八しほはこちらに背を向けたまま立ち止まった。まだ気まずいのか、ああと短く返事だけで、そのまま振り返らずに大部屋の方へ歩いて行く。それを追うように、もとめも中へと駆けていった。その胸にはしっかりと団子の包みを抱いて。それを見て、なんだやはり嬉しかったのかと思つたとめ夜も、蚊が寄つてきたので、慌てて追い払つて建屋の中へ逃げ込んだ。

五.

翌日の晩は、床夜は血の道で身揚げりということ、とめ夜は他の花魁の座敷へと呼ばれた。当然越前屋も来ていない訳で、今日もしまた宴会でもあれば修羅場になりかねないと思つていたとめ夜は、苦しんでいるであろう床夜には悪いがひとまずほつとしていた。

「……離せ。離さんか……」

「こらてめえつ、暴れるな……」

「……何やら騒がしいね」

座敷の外、下の階の方でどたばたと騒がしい音がして、客が顔を上げる。何やらけたたましく喚いているのは、とめ夜の耳が確かなら、もとめの声だ。

「旦那、ありゃあ床夜花魁とこの禿でありんす。一刻ほ

ど前に足抜けを企んで、大門近くでとつ捕まりんしたのサ。それが今もまだ、暴れているのでありんしよう」

「はつは、そうかそうか。それは惜しいものを見逃したな」

告げ口するように口元を袂で隠して話す振新に、客は愉快そうに笑い、お前の妹になつていればもう少し落着きも出たかもねえと花魁におべっかを言っている。話を振られた花魁は、さて、と鼻で笑つた。

「わつちやあんな猿公、預けられたとて人によあ出来んせん。まして新造になど、とてもとて……」

「はは、天下の住江すまのへの手にも余るか。床夜花魁も大変な妹を抱えちまつたもんだねえ」

げらげら腹を抱えて笑うお客は、御用商人だか何だか知らないが、まるで品がない。一緒になつてくすくす笑う新造や住江花魁にも、嫌なものしか感じない。もとめだつてやり方が拙いだけで、あれで色々と不安を抱えて大変だというのに。性根はお前達よりよつぽどまだと内心毒づいていると、勢いよく駆けてくる音がして、襖が開け放たれた。

「も、もとめ……」

「あの女はどこじや。ここにはおらんのか。畜生め、どこに逃げおつた……」

座敷の中を一度ぐるりと見回すと、そのまま襖も閉め

ずにまたどこかへ駆けていくもとめ。それに皆が面食らつてしていると、追つて番頭が駆けてきた。

「申し訳ございません旦那……」

顔を出すなり平謝りする番頭の向こうを、若衆がどたと走っていく。額を畳に擦りつけるようにして謝る番頭だったが、既に相当酒の回っている客はさして気にしておらず、ようやく取り押さえられて連れてこられ、無理くり頭を下げさせられたもとめのことも、笑つて許した。

「いやあ、面白い趣向だね。見せ物小屋みたいで、こういう晩も悪くないものだ」

もとめは猿回しの猿か。そう思つてむつとするが、流石にそう言われても仕方のないことをしてかしているから、庇う気もすぐに失せた。

そういえば、ととめ夜は目だけで辺りを見渡す。もとめは誰を捜していたのだろう。ここにはおらんのか、と言つていたということは、ここにいるはずだがない誰かだ。となると、住江か床夜の妹の誰かだろうか。十六夜の今宵、住江の新造も何人か座敷に出不来ない者がある為、床夜の妹分は皆こちらに回されている。さりげなく見渡すと、いるはずなのに姿が見当たらないのは八しほだった。どこへ行ったのだろうと、近くにいた住江の禿にさりげなく聞いてみるが、やはり知つてはいるはずも

なかつた。

「捜してきた方が良うありませんか。また足抜けの算段をしているやもしれんせん」

「でも今お座敷を抜ける訳には……」

「姐さんにはわつちから言つておきんす。心配いりんせん」

「……真でありんすか。恩にきんす」

よく氣の回る禿に礼を言つて、そつと座敷を抜ける。回廊を駆け抜け、他の座敷も覗きつつ、厠や大部屋、布団部屋、勝手口の方も捜すが見つからない。もしやと思つて床夜の部屋も訪ねたが、顔を青白くさせた床夜が布団で丸くなつているばかりだった。

「……何かあつたのかえ。また八しほか、それとももとめか」

「えつと……八しほ姐さんでありんす……」

首をすくめながら正直に答えると、床夜の眉根がぐつと寄つた。白粉をはたいていない顔は血の氣がなく、抜けるように白い。結つていない垂れ髪がかえつて艶かしいが、爪は紫色をしている。具合の悪い姉に教えるべきではなかつたかもしれないと思うが遅い。わつちも捜そう、とふらつく足で立とうとする床夜を宥めていると、誰かが駆けてくる音がした。

「花魁、床夜花魁、大変でありんす……」

住江の座敷にいたはずのたよりが、息せき切つて飛び込んできた。

「姐さん、八しほ姐さんがっ……」

「落ち着け、たより。八しほがどうした」

たよりは今にも泣きそいで、床夜は素早く水差しの水を飲ませてやる。とめ夜も背中を擦つてやると、たよりは震えながら、床夜を見上げて、ひとつ大粒の涙をこぼした。

「足抜け、しんした……っ」

ひゅっと思を飲む。はっとして床夜を見ると、口を真一文字に引き結んで、拳を戦慄かせている。

「もつめが足抜けに失敗して騒ぎになっていた隙に、大門を抜けたらしいと……」

「ならば、もう抜けて一刻経つのか」

床夜の声に焦りが見える。一刻もあればどこまで逃げられることか。床夜の顔が一層蒼白になり、唇は嚙みしめられすぎて破れそうになっている。そこへ更にもう一人、誰かが飛び込んできた。

「花魁。床夜花魁、越前屋の旦那が……」

若衆の知らせに、何故こんな時にと眉を寄せる。今夜は約束していないはずなのに。床夜も同じことを思ったのかいぶかしげな顔をするが、次の言葉に、目を見開いた。

「八しほを連れて、下にお越しに……」

聞くや否や、床夜は立ち上がり、上草履も履かずに部屋を飛び出した。とめ夜はたよりと顔を見合わせ、すぐ二人して姉を追う。階段を駆け下りると、内証の前に、見世の主達と、越前屋と、八しほがいた。

八しほは一心に越前屋を見つめていて、主達は鹿威しのように何度も頭を下げている。越前屋は困ったように手を振っていたが、床夜の姿を見ると、ぱっと顔を明るくした。

「仁様……」

「床夜。大丈夫かい、顔が真っ白じゃないか」

白無垢の寝間着で現れた床夜に駆け寄った越前屋は、彼女の顔にかかった髪をそつと耳へかけてやっていた。床夜は腹が痛むのか気疲れからか、ぐったりと越前屋によりかかり、越前屋はそれを支える。何事かと集まってきた野次馬が、苦し気^げに顔をしかめる床夜の顔を見て、喉を鳴らしているのが分かった。その中には、あの住江の客も。

「床夜、部屋に行こうか。話はそこでしょう。今宵の揚げ代も、私に払わせておくれ」

「お前はこつちだ、八しほ」

「あつ、仁兵衛様……」

越前屋は床夜を皆の目から隠すように肩を抱き、彼女

を促す。お香が八しほを引つ立てようとするが、八しほは若衆に囲まれつつも越前屋へと手を伸ばす。越前屋が振り向きかけた時、彼の袖を引いたのは、床夜だった。

「仁、さま……歩けん、せん……」

そう切れ切れに訴えた床夜に目を奪われたのは、越前屋だけでなく、野次馬衆もだった。

越前屋が慌てて床夜を抱き上げたので、とめ夜はたよりと共に越前屋を先導する。最後にちらと振り返った先では、八しほが茫然と立ち尽くしていた。

六.

座敷には沈黙の帳が落ちている。誰も何も喋らない。

とめ夜は、己の心の臓の音が中の二人にも聞こえてしまっているのではないかとひやひやしながら、障子の隙間からこっそり様子を窺っていた。

八しほが足抜けた日から十日ほど経った。

彼女は抜けた後、一目散に越前屋を目指したらしい。

見世の若衆の着物を盗んで男に化け、もとめが捕らえられた騒ぎに乗じて大門を抜けたが、仁兵衛は彼女を見るや否や店の者に八しほを捕まえさせたそうだ。確かに足抜けに加担した男にも制裁が待っているし、自ら廓へ戻った方が八しほの罰も少しは軽く済む。仁兵衛は正しかったが、八しほのことを考えると少々酷な対応だった。

その彼女は道中の駕籠の中では大人しかったということだったが、それは越前屋から逃げてまでして他に行きたい所もなかった為だろう。

今度ばかりは床夜も庇いきれなかったと見えて、八しほは西河岸の方へ売られていった。足抜けた女郎を捜すのにも人手がいる、金がかかる。前から住み替えの話はあったそうだが、その度に床夜が間に入っていたらしい。しかし今回はもとめを利用して抜けようとしたのが、姉の堪忍袋の緒を切る最後の一閃だったようだ。

——言うたよなあ、もう面倒は見切れんと

それ以上の言葉はなく、八しほも何も言わなかった。他の者とは最後まで話すこともなく、八しほはあれよあれよという間に桐屋を追われた。

もともと当然、随分な折檻を受けた。床夜の計らいで住み替えは免れたが、とめ夜達も昨日まで会うことができずつと心配していたら、今朝がた久々に会ったもめは全身ぼこぼこに膨れ上がっていた。聞けば、押し入れに閉じ込められて蚊責めにあったのだという。搔けば痕になり値が下がる。痒かろうに、もとめは膝の上で拳を握りしめていた。

「……もとめ」

生温かい風が床夜の鬢の毛を揺らし、ようやく彼女が口を開く。もとめの動揺が、こちらへも伝わってくるよ

うだった。

「今から西河岸へ行け。八しほの様子を見て来な」

少し間を置いて、もとめがどもりながらも諾と答えたのが聞こえる。慌てて物陰に隠れると、もとめがこちらに気づかず、座敷を出ていった。

「……お前も行ってみるか、とめ夜」

その後ろ姿を目で追っていると、呼びかけられて肩が跳ねる。恐る恐る振り返ると、煙管を手に笑っている床夜がいた。

あまり長居するなよとの注意だけ受けて桐屋を出る。

階段を下りると、籬まがきの前で新造の一人に引き留められているもとめに追いついた。腫れた顔で外に出るのを哀れに思われたのだろう、かぶせられた頭巾は見栄えのするものではなかったが、見るも無惨な赤い顔は一見して分からなくなった。

一緒に行こうと誘って、二人で西河岸へと向かう。見世の前の通りをまっすぐ進み、仲之町を越えて一丁目へ。その先にある西河岸は、この吉原における場末の一面だ。桐屋のような大見世などありはしない。小見世ですらない長屋に遊女が詰めているとか、一回何文かで身体を売るのが故に年季明けなどないとか、噂は聞くが今まで行ったことはなかった。八しほも今回売られるまで縁はなかったらう。

風鈴が吊された軒の前をいくつも通り過ぎる。後れ毛がうなじに張り付く。足袋の中が蒸れるようになってきた。もう夏だ。

西河岸に着くと、間口の狭い局見世が並んでいた。中もひどく狭そうで、三畳といったところだろうか、布団を敷いたらいっぱいになってしまいそうに見える。入り口の戸は開け放たれ、遊女達は中で座ったまま、通りを行く男達に声をかけていた。

「八しほ姐さんは……」

「あ、あれ」

もとめが指さした先には、一棟を唐紙で仕切っただけの粗末な長屋。その一間で、長煙管を弄ぶ八しほの姿が、そこにあつた。

八しほは客引きをするでもなく、どこか空を眺めて煙管をくわえていた。その市松人形のような目にひるみつつも近寄る。だが何かおかしい。そうだ、煙だ。煙管の雁首からも、彼女の口からも、煙が全く出ていない。火の着いていない煙管をくわえているのか。もとめと顔を見合わせ、そろりそろりと彼女の長屋へ近づく。

部屋の中には何も無いように見えた。土間の横に陰になつてゐる所はあるが、あそこに置けるものといつてもせいぜい鏡台くらいだろう。遊女にとって最も大切な商売道具と言つてもいいはずの布団さえぐしやぐしやに跳

ねのけられていて、せめてそれくらいきちんとすればいいのと思う。

その時、カン、と音がした。見れば、八しほが火鉢に煙管を打ち付けている。灰を落とそうとしている動きにも見えるが、八しほは明後日の方を見たまま、ぼんやりと二度、三度と火鉢のふちを叩いている。

「……ああはなりたくねえの」

溜息を吐くように、ぼそりともとめが呟く。八しほには悪いが、とめ夜もその言葉に頷いた。もう行こうと言うもとめと一緒に、長屋を後にする。少し離れた所まで来ると、もとめはあーあと背伸びをした。

「床夜姐さんに面倒見てもらえるのをありがたがれと言わたくせして、あのさまか。自分こそ客もまだ取らん分際で、調子に乗りすぎたのう」

「……そういや、もとめもじきに張見世か」

足抜け騒ぎで忘れていたが、もとめが突き出しの客を取るのは今月だ。あれほど嫌がっていたようなのに、とめ夜がそう口にしても、もうもとめの顔色が変わることはなかった。

「もう、逃げようとは思わんのか」

「あれを見れば、わっちゃあまだ恵まれとる方と嫌でも分かる。折檻も懲りた。それに、廓の外に逃げたとてことそう変わらんと言ったのは、お前じゃろう、とめ

夜」

憑き物が落ちたようなすつきりした顔でそう語るもとめを見て、とめ夜は目を瞬かせる。あの落着きのなかつたもとめが、こうまで変わるものか。こうなる事を見越していたとすれば、あの晩見せた顔といい、床夜もあれで優しいだけの人ではないのかもしれない。

「花魁になるのはお前えみてえなのに任せて、わっちゃあ適当に留新でもやってるさ。食わせてくれよ、花魁殿」

自分より二つも上のくせしてあっけらかんと何を言うか、と呆れ半分睨むが、もとめはからからと笑うばかり。花魁になりたいのになれないと嘆いていたもとめを憐れんだ己が愚かに思えてきた。苦勞して誰かの食い扶持まで稼いでやらなければならなくなる自分の方が、もとめなどより遥かに哀れではないか。

「誰が花魁じゃ。まだなつとらんわ」

「だが、いづれなるのだろ」

「……まあ、なるが」

振新になったとて八しほのように道を踏み外す者もいる。床夜のように妹達の為の借金で年季を伸ばす者もいる。それでもとめ夜は、花魁になることしか眼中にない。

己が身に降りかかった災厄を恨むばかりで、何もせず

にただ嘆きながら死んでいった母を見返す為に。男に頼らねば生きられなかった母を嘲笑う為に。

(女とおおぜは稼げる。お前のこさえた借金は全て返してみせる。地獄の釜の中から、指をくわえて見ておれ)

拳を握りしめ、元来た道を並んで桐屋へ帰る。

二人の通り抜けていった江戸町を風が吹き抜け、風鈴が夏の到来を告げた。

第二部 住江すゑのの事

一。

新造出し。それは新たな遊女のお目見えの儀であり、同時に、姉女郎の甲斐性をも見せつける、小さな戦場いくさばである。

桐屋もまた、その戦のただ中であつた。格子の前から通りの中程まで井桁に積み重ねられた材木。その上に積せた白木の台へ、縮緬、緞子、錦の類をこれでもかと思ひ飾っている。姉である床夜の座敷にも、やはり白木の大台に、反物、煙草入れ、扇、或いは手ぬぐいを、見世に出入りする者達への祝儀として乗せている。

そして今回新たに新造となつた当の本人は、これまた床夜の金で新しく仕立てた着物で着飾って、寒空にもか

かわらず黒山の人ばかりで賑わっている仲之町を練り歩いていて。

この新造出しは七日の間続く。正確に言えば、新造出しの十日ほど前から準備は始まっていて、お齒黒の付け初めだとか、縁のある茶屋や船宿に蕎麦切りを贈るだとか、赤飯を蒸して配るだとか、見世の者は大わらわだつた。そして言い添えておくと、この度新造となつたきつう、禿時代の名をとめ夜というが、彼女はまだ振袖新造であつて、客はもう暫く取らない。客を取る留袖新造より一段上の振袖になるのは、見世の主達と床夜の総意であり、自分はそれだけ期待されているということがそこからも知れる。仕込んで仕込んで満を持してから、上等の客に宛がおうという訳だ。それに不安を覚えていてと、つん、と姉に頬を突かれた。

「何を害虫を噛み潰しておる、きてう。さては新造出しが気に入らんかったか」

床夜の言葉に、まさかと慌てて首を振る。あれだけの新造出し、何百両かかったか考えるだけで背筋が寒くなる。床夜の客もいくらか祝儀を出してはくれたらしいが、床夜もかなり借金を増やしたはずだ。自分はそれに見合うだけの遊女になれるのか。そしていつか、同じことを誰かにしてやれるのだろうかというところが俄に不安になつたと言えば、以前にもまして色香をほとばしらせ

た姉貴分は、口元を袖で隠してころころと笑った。

「気持ちに分かるぞ、きてう。わっちとて、新造になつた頃は同じことを考えておつた。じゃがの、お前えがかつて禿にしてくれとわっちに頼み込んできた時に、ああわっちはこれを育てれば良いのかと知つた。お前えもそのうち、誰か見つかるうて」

「……そんな酔狂な者、そうそういいねえと思ひんすが……」

自分とて、見目だけは良かった母譲りの貌かみほせに自信がないではないし、床夜が見立ててくれた着物で着飾つた己の新造姿はなかなかのものと自負している。だがあの時の床夜に見たかぐや姫のような神々しさを、自分は纏えているだろうか。三界に敵なしといった床夜と比べ、自分は果たして他の大見世の花魁と渡り合つていける器なのだろうか。

「今から焦つてどうする。見世を背負う気概があるのは悪かねえが、お前えは水揚げもまだであろう。禿に毛が生えただけの、まだまだ童じゃ。案ずるなきでう、その為にわっちがおる。教えられることは教えよう、お前えも学べることは盗むように学べ」

頼もしい姉の言葉に、花魁とはこうもあるべきなのかと知る。皆の先頭に立ち、導き、先の見えない暗い夜の世界を照らして歩く背中。江戸の遊女は張りが命という

が、なるほどこのことか。死んだ兄と同年でありながら、この人は初めて会つた時から、兄よりもずっと頼もしく、兄よりも遙かに逞しかった。

「……花魁はおとつあんのようじゃの」

「なにゆえそうなる。せめて姉やにせぬか」

おつかさんでもなく姉やか、と二人で笑い合い、その日はそれで話は終わった。

そして、きてうの前にその禿がやってきたのが、その翌日。

「姐さん、わっちを姐さんの禿にしてくりやれ」
現れた。

五年前に床夜に詰め寄つた己が、もう一度現れた。そう思つたくらい、一言一句違わぬ台詞を持つてして、その禿は迫つた。

床夜に。

「……ええと、すまん、名を何と言うたかの」

「ひくてでありんす。床夜姐さん、わっちを姐さんの妹にしてくりやれ」

床夜の部屋で、床夜に言い募るひくてを見ながら、普通はこうだわなときてうは溜息を吐く。禿が見ることが出来るのは、仲之町の練り歩きではなく見世の前に積み重ねられた山のような祝儀だ。それは確かに床夜のきてうへの期待の表れでもあるが、逆に言えば床夜は期待し

た妹へはあれだけの金をかけてくれる人だということでもある。花魁になるかも分からぬ振新よりも、今全盛を誇る呼び出しの世話になりたいと思うは人情であろう。

「……ひくて、良う聞け。お前えはわつちの禿にはなれぬ。お前えは既に住江殿の禿であろう。晦日に月が昇らずとも、姉への義理を欠くことがあつてはならぬ。八徳を忘るるは亡八だけで充分じゃ」

ひくての頬を両の手で挟み、その双眸で相手を射る床夜。時折床夜は、このような目をするところがある。温かくもなく、さりとて凍てついてもおらず、静かに捉えて離さぬ眼。あれにもう少し憂いと湿り気を帯びさせれば、客は骨抜きになる。ひくてもまた、その目から逃れられないようだった。

「住江殿は張りも意気地もあるお方よ。住江殿の禿たることを誇れ、ひくて。住江殿によく仕え、住江殿からよく学べ。もうわつちの妹になりたいなどは言うな。良いな」

「あい……」

呆けたように返事をしたひくては、ぼんやりしたまま踵を返し、ふらふらと部屋を後にする。あんな夢うつつの足取りで階段を踏み外したりしなきゃいいが、とその背を見送っていたきてうだったが、のそのそと火鉢の方へといざり、手をかざした床夜は、ぼつりと呟いた。

「幼子の頬はぬくくて良いのう……」

「は……」

「ひくての顔じゃ。火鉢も良いが、人肌の方が芯から温まる気がせんか。近頃とみに冷えるからのう、やはり猫でも飼うか……」

むう、と考え込み始めた床夜に、きてうは開いた口がふさがらない。わざわざひくての顔を捉えたのは、手のひらを温める為か。

「ん、猫も良いが湯奴も良いな。きてう、食べに行かぬか」

「……お供しんす」

先刻の真面目な顔はどこへいったのかという呆れもあつての寸の間の逡巡ののち、きてうは折れた。昼日中とはいえこの寒空の下に出ていくのは躊躇われたが、湯豆腐は食べたい。支度を済ませ、素足に上草履をつっかけ階段を下り、一旦床夜と別れて、大部屋に屯たむろしていた他の妹女郎達を呼びにいく。寒い中出掛けるのも厭わぬ者だけ着いてこいと言ったが、皆立ち上がった。女郎は飢えていた方が、客に食べ物をせびって茶屋や見世に金を落とさせるからと、見世の朝晩の食事はあまり多くないのだ。それもあつて床夜のように妹をこうも繁く買ひ食いに誘う姉はそうおらず、大部屋のあちらこちらから羨ましがれる声上がる。それを背に見世の土間の方へ

連れ立って行くと、その土間の所で、床夜はこちらに背を向けて立ち尽くしていた。

「床夜花魁。お前えさん、わっちに何か言うこたアありませんのか」

見れば住江と相對している。何やら揉めている、というか見るからに住江が床夜に突つかかっている。もしや先刻のひくての事がもう露見したか。きてうは眉間にしわを寄せて、後ろにいた朋輩や後輩を戻らせた。

「……何の話でありんしょう」

「空っとぼけなんすな、お前えさんがあの子を誑かした事でありんすよう。人の禿に手え出すなんざ、床夜花魁ともあろう者がこすい真似をしんすなあ」

「さような覚えはありんせんが」

「良う言いんす。ひくてはわっちの禿の中でも殊に利口な子、それを引き抜こうとされて、姉のわっちが黙っちゃあおられんせん」

声高に語る住江だが、彼女は一体どうやってこんなにすぐに、先刻の出来事を知ったのだろう。誰かが聞き耳を立てていて告げ口したか、それともひくて当人が口を滑らせたか。どちらもあまり合点がいかない。きてうが顔をしかめていると、こちらに背を向けている床夜がわずかに斜に構えた。それによって、床夜の片腕が、彼女自身の身体で住江からは見えない位置にくる。背に隠れ

たその片手、それを住江に気取られぬよう見ていると、床夜は親指、人差し指、中指の三本の指を擦り合わせた。何か付いているようにも見えず、何だ、と顔を上げると住江の同じ所が目に入る。

赤い。

それに気づくや否や、そっと二人から背を向ける。大部屋へ顔を出し、そこにいる顔をぐるりと見渡すが、目当ての者はいない。さっき帰したばかりの朋輩、不安げに駆け寄ってくる彼女達に事の次第を手短に話し、手伝いを頼んで、散ってもらった。きてうは行き違いにならぬよう、大部屋でそのまま待つ。

「きてう、おつた。布団部屋じゃ」

留新の千夜のが戻ってきて、声を潜めつつ言う。頷いて、千夜のはここに残ってもらい、布団部屋へと急ぐ。少し開いていたそこに滑り込むと、二つの影が蹲っていた。

「ひくて……大丈夫か」

一人はやはり床夜の新造である若世で、若世に抱きこまれるようにして俯いていたのがひくてであった。ひくての顔には若世が汗ぬぐいを当ててやっついて、泣いているようにも見えたが、しゃがんでその顔を覗きこむと、汗ぬぐいが一部赤くなっているのが見えた。

「打たれたのか……」

背を擦ってやりながら問うと、ひくてはわずかに頷いた。住江め、と舌を打つ。取られたくないなら、もっと大切に扱ってやれ。こんな仕打ちをされては、床夜の下に来たくなるのも道理ではないか。

「……もう止まりんした。ありがとうございんす」

しばしして汗ぬぐいを取ったひくては、若世に礼を言つて手首で鼻の下を擦る。鼻血が少し横に伸びて、赤い髭のようになった。

「……何があつた。言えるか」

「それが住江め、わっちが床夜姐さんの部屋に行つた時、立ち聞きしておつたんじゃ。それでわっちをここに押し込めて、打ちおつた。何も言わずにじゃ。耳が聞こえんくなつたらどうしてくれよう」

傷ついているかと思いきや、存外に元氣そうなひくてに、これは案外大丈夫そうだと、若世と顔を見合わせて肩を落としていると、かこかこという上草履の音が聞こえてくる。振り返ると、そつと襖が開いて、千夜のと共に床夜が顔を出した。

「ひくて……」

「床夜姐さん」

眉尻を垂らして入ってきた床夜にひくては飛びつく。そのしおらしさはどこに持ち合わせていたのやら、恐ろしゅうありんしたと縫っている。この分なら、住江の下

で禿をしても充分出世は叶うのではあるまいか。口には出さずとも若世も同じことを思っているようで、ひくてを床夜に任せ、そつと布団部屋を出て千夜のへと寄る。割に早かつたなと囁くと、内証の前だったので主が間に入ったのだという。床夜がひくてを欲しがろうがやらせはしない、と主が住江に言つたことで、一旦は話が終つたそう。

「やらせはせん、とは言いんすが、そも、花魁はもう何人も妹を抱えていんしょう。もう一人増やすんざ、どだい無理な話でありんす」

「それでも言わねえと、住江が承知しなかつたんだらうさ」

妹女郎は独り立ちした後でも、姉女郎を立てねばならない。また、妹の評判は姉の評判にも関わってくる。一番出世の望みがあるひくての気持ちだが、よりにもよつて住江が最も目の敵にしている床夜に傾いたことに焦りを覚えたのであろう。

「しかしそうまでして取られたくねえのなら、まちつと大事にしてやりやあいいものを」

千夜のの言葉に全くだ、と三人で頷き合っていると、布団部屋から床夜が出てきた。ひくてはまだ中で座り込んで見えるのが見える。

「今出てきたら、住江殿の氣に障ろうからの。もうちつ

とここにいさせることにした。きてう、この金で皆と甘酒でも飲んでおいで。わっちは部屋に残る。それと千夜の、悪いがお前えは、住江殿が部屋から出てきてひくても虐めねえよう、見張っていてくれるか」

「わっちの甘酒は……」

「きてう、買ってきておくれ」

「あい。花魁と、千夜のと……ひくての分でありんすな」

手に握らされた小銭を数え、後輩達と飲みに行つてなお余る額が、ちょうど三人分であるのを確かめる。唇を尖らせて拗ねる千夜のに、寒い中出掛けずに済むのだから良いではないかと諫める花魁を背に、若世と他の禿衆の方へ向かう。

こういうことを他所の禿にするのはよした方がいだろうにという小言は、今度ばかりは胸の内にそっとしまつておいた。

二.

住江花魁は、昼二分の附廻しである。元は土分の、そこそこの家の娘だったとかで、桐屋にやってきた時には既に充分な教養を身につけていたという話だ。歌舞音曲の腕もそれなりで、十三という禿にしては少々年かさの頃に売られてきたが、すぐに引つ込みの仲間入りをした

とか。だが気位が高いのもその頃からだったそうで、器量が良いと評判だった三つも下の床夜に、何かとよく突つかかっていたらしい。

「まだ引つ込みにもなつておらん、十の年の床夜姐さんにじゃぞ。大人気なかるう」

屋四ツの桐屋。大部屋で朝餉を食べながら、きてうは隣の千夜のがひくてにそう語つて聞かせているのを、聞くともなしに聞いていた。一体どこから仕入れてくるのか、千夜のはそういう話に詳しい。牛蒡の煮たのをぼりぼりとかじつしていると、くるりとこちらを振り返られた。

「覚えておるか、きてう。随分前に、ふぢ浪という花魁がおつたじゃろ。あれが住江の姉だったそうな」

「ふぢ浪……ああ、床夜花魁に随分と嫌味を言うておつた……」

「そう、そのふぢ浪じゃ。それでなひくて、その住江の姉は、床夜姐さんの姉が気に入らなかつた。姉の敵は己の敵、そして敵の妹も敵。住江はますます床夜姐さんといびり倒すようになったという訳じゃ」

何の為に話を振ってきたのだから、すぐにひくてに向き直つた千夜のを横目で見つつ、雑味の多い吸い物を啜る。

そういえば、床夜の姉、雨杏もこの見世の看板女郎だ

った。床夜とは随分気性の異なる御仁であつたが、きてうにしてみれば可愛がられた覚えしかない。きてうの最初の姉が鳥屋とやについて、すなわち梅毒で臥せつて客を取れなくなつた時、世話を買つて出てくれたのが雨杵だつた。その時全盛だつた己をすつ飛ばして妹に懐いた禿など生意氣だと蹴り飛ばされてもおかしくなかつたのに、見る目があるのうと笑うばかりで結局自身の年季明けまで面倒を見てくれた。今は何人かの旦那の妾をしているとかいふ話だ。身請け話もちらほらあつたのに、最後まで廓に残つたあの人らしい生き方だと思ふ。だが今の住江にそっくりなあのおぢ浪なら、さぞや目の敵にしたことであろう。

「住江はじきに床夜花魁だけでなく、わつちら妹もその的とした。三年程前か、お前えはまだおらんかつたな、八しほという床夜花魁の振新がおつての。何度も足抜けを企む迷惑な奴で、あんまり面倒ばかり起こすので最後には西河岸へ移された。その時住江は、床夜が全然叱らぬから我儘放題育つたのざんしょと、これ見よがしに笑つておつたわ」

「……おい千夜の、その話はお前えの為にもやめておけ。あの騒動の時、八しほ姐さんと一緒に足抜けしようとして失敗したお前えも、随分と馬鹿にされておつたぞ」

何も知らぬ禿相手に調子に乗っている千夜ののに釘を刺す。顔を赤くした千夜を見て、ひくてはぼかんとしたいたが、斜向かいに座る若世は苦笑いしていた。

「……一緒に抜けようとしたのではないわ。手形があればおなごも大門を通れると教えられたから、試してみようとしたらちよいとやり損ない、その隙に八しほがまんまと抜けおつたんじゃ」

「……それは、初めから利用されていたのではありませんのか」

ぶつぶつ言い訳した千夜のだが、ひくての言葉にぐつと押し黙る。成程これは有望だと思つたきてうは二、三度領いた。

「しかし、何ゆえ花魁があのよう怒るのか不思議でありんしたが、そんなにも長きに渡る因縁でありんしたか……」

小さな焼き魚をばりばり噛み砕きながらひくては呟く。相手が床夜でなければ打たれるまでにはならなかつたのかも、しくじつたと肩間にしわを寄せているが、そんな事は恐らくあるまい。誰が相手だつたとて、住江はきつと火を噴くように怒つたらう。

それを考えると本当に、雨杵はよく自分をあかも可愛がつてくれたなときてうが不思議がつていると、大部屋の方のがこがこという足音が近づいてきて、件の住江が

現れた。

「ひくて。ひくてはどこだい」

「ぐっ、う……ん、あい、花魁」

丁度口に沢庵を放り込んだばかりだったひくては、高い住江の声を聞いて、必死の形相で口の中の物を飲み込み、姉の下へ駆けていく。何か文を預けてすぐに引込んでいった住江を見やっていると、ひくてが溜息と共に戻ってきた。

「……また高杉様への文でありんす」

「ああ、あの、住江の情夫の」

「そう思っておるのは花魁だけのようでありんすがの。」

近頃はとんとおいでなんせんゆえ」

「じゃあその文は、振られ女郎の悪あがきか。哀れだの」

千夜のの擲諭に、ひくては全くだと鼻で笑う。

その横顔がどことなく住江に似ているように見えて、きてうは静かに茶を啜った。

三.

夜の吉原に拍子木の音が響く。打たれた数は四つ。時刻は「引け四つ」だ。

きてうが同席していた床夜の座敷の酒宴も、その音を合図にお開きとなって、新造や禿達はやれやれと寢支度

に取り掛かった。

「引け四つ」と言うが、これは夜四つ（午後十時）のことではない。外の世界では暁九つ（午前零時）と呼ばれる頃合いだ。本来四つに店じまいしなければならぬところを、吉原は拍子木の数さえ誤魔化して長く営業するのである。泊まりでない客はこの音を目処に帰し、張見世も終えて新たな客は上げなくなる。しかし、泊り客がいる遊女はもう暫くは眠らずに客の相手をせねばならない。今から床入りの床夜も、あと一刻は寝かせてもらえないだろう。

寝衣に着替えたきてうは、寝る前に厠へ行っておこうと思った。見世には一階と二階に厠が設けられているが、二階は客用で、遊女や使用人は一階のものを使うことになっていて。それでなくともきてう達自室を持たない遊女が寝起きする大部屋は一階にあり、わざわざ二階へ行くのも手間だ。二階にある姉の座敷にいる時は当然二階のものの方が近いが、前の晩から居続けの客と出くわさないとも限らないから、普段から一階のものへ行く習慣をつけておいた方が無難である。

大部屋にいる新造や禿の大半はもう床についており、中にはすでに眠りこけている者もいるようで、きてうは心持足音を忍ばせて部屋を出た。足元から冷えが上ってくるような廊下を渡り、厠へ向かう。二階にある姉達の

部屋からは悲鳴のような嬌声が漏れ聞こえ、誰かが飼っている猫の声も時折混じる。内証の方からは今日の仕事を大半終えた見世の主と内儀が談笑しているらしき声がわずかに聞こえた。

騒がしい訳ではない。むしろ騒がしくないからこそ、些細な物音もよく耳に届く。厠には誰ぞいるかもとも思つたが誰もいないらしい。待たずに入れると思つて、くあ、と欠伸をした時。

「きてう……」

背後から袖を引つ張られて、心の臓が口から飛び出すかと思つた。

「ひ、ひ、ひくてか、吃驚させるな」

ばくばくと激しく打つ心臓を宥めるように胸に手をやって、きてうは振り返つた先にいた禿をたしなめた。しかしひくては聞いていないようで、きよるきよると辺りを見回すと、しーっと人差し指を口元に当ててこちらを睨んできた。

「静かにせんか。誰か来たらどうする」

「お前が驚かせたのだろ……」

肩を落としながら溜息を吐く。この禿は一体何がしたい。先だつて住江に引つ叩かれたのをもう忘れたかと首を傾げるが、千夜のはあるまいしそれほど愚かな娘でもあるまい。一体何の用かと問えば、ひくては未だに辺

りを気にしつつ、囁くように口を寄せてきた。

「聞きたいことがある」

「後にしろ。それか他を当たれ」

「こんな刻限でもなければ住江に見つかる。他の者は頭と口が軽い」

ほおー、ときてうは軽い調子で呟いた。賢しいとは前から思つていたが、やはりなかなか言う。それに煽おだつてが悪くなかつたので、答えてやることにした。

「良からう、言うてみい」

「ほんにか。やはりきてうを選んで正解じゃつた」

「もういいから、早はやう言えい」

あまりこう立ち話をしてしていると冷えてかなわない。立っているのが面倒で、視線を合わせる振りをしてしゃがみ、膝に肘を乗せて頬杖をつく。背伸びをして口を寄せていたひくては今度は腰を少しだけ曲げて、顔を近づけてきた。

「……世話になつていた姉がおらんようになった禿は、どうなるんじや」

「は……」

深刻そうな声音でそう言われ、きてうは目を瞬かせた。

「……なにゆえそんな事を聞く」

「少し気になつて……だが住江に聞けば、また叩かれか

ねん。それでお前えに聞こうと」

ふうん、と鼻から漏らして、きてうは僅かばかり目を細めた。ひくてが微妙にそわそわしているのは、誰かに見咎められるのを恐れてか、それとも何か嘘を吐いているからか。じつと見据えると、ひくては目が合った途端、今度はそらさなくなった。それはそれで怪しいが、問い詰めたところで吐く相手ではあるまい。何せあの住江に似ている禿だ。ならば別に隠すような事でもあるまいしと、口を開いた。

「……そうさなあ。確かに姉がおらんようになることは、生き死にに関わらずまああるな。年季明けに病、足抜け、心中。いずれにせよ、禿は置き去りになる」

「その時は……」
「別の姉の世話になるのが普通じゃ。わっちもここに来て最初の姉が鳥屋についた時、他の姉の世話になったことがある」

ひくては大仰に頷いて、真剣に話を聞いている。

「前に千夜のが言っておった、住江の姉が毛嫌いしておった花魁でな。床夜姐さんが部屋持ちになるまで、わっちはそのお人の世話になった」

「部屋持ち……とすると、床夜姐さんの最初の禿は、きてうなのか」

「まあな。本来、初めて持つ禿は、他の遊女からもらっ

てはいけねえと言うが……全員納得すぐだったしな。妹になりてえと騒いでおったら、そういう流れになっておった」

「言うておったら、妹にしてもらえたのか」

ひくてはそれを聞くや否や、目をきらきらと輝かせ始めた。しかしきてうがそれに対して何も言わなかったのは、話しながら頭の片隅で別のことを考えていた為だった。住江の今の年齢。次の正月で幾つになるのだったか。床夜の三つ上だと千夜のが言っていた。とすると、ひいふうみいで。

(……ああ、成程)

得心がいったきてうは、横に目をそらした。視界の隅でひくてが瞬きしているのが見える。はあ、とひとつ溜息を吐いて、頬杖の手を替えた。

「ひとつ言うておくが。住江の年季が明けたとて、床夜姐さんの妹になれるとは限らんぞ」

「……」

そう告げると、ひくては目を数度瞬かせて、黙り込んだ。だがそれは衝撃を受けたと言うよりは呆けただけに見える、思っていた反応と少し違うと僅かにいぶかりつつ、続ける。

「誰を誰の妹にするか決めるのは大概が見世の親父じゃからの」

「しかし、きてうは床夜姐さんの妹になりたいと言つて、叶えてもらうたのじゃろう」

「わっちの場合は自分で言うのもなんだが、運が良かった。前の姐さんが親父に話をつけてくれたしな。しかしお前もそうとは限らん。面倒見のいい姐さんのことだ、住江の年季明けの頃も大勢妹を抱えていて手一杯ということもあり得る。身請けの話が来るやもしれん。期待はせん方がいい」

「身請け……今、誰ぞに身請けされる話があるのか」

「今はねえが……今なかったとて、いつ来るか分からんぞ。花魁のお敵は皆金持ちのお大尽、その気になれば千両箱ひとつくらい用意できる御仁ばかりじゃ」

まだ借金を返し終えていない花魁を請け出すには、途方もない額の金が必要。日々の食事代や諸芸を習うのにかかった月謝などで借金は膨れ上がっているし、花魁がその後働いていたら稼いでいたであろう金も加算される。見世の者への祝儀なんかも馬鹿にならない。千両箱ひとつというのは、あながち物の例えという訳でもなかった。

それでも床夜の客には、それが出来る者が揃っている。床夜の身請け後は女郎達がこぞって奪い合いそうな、地位と財力と人徳を兼ね備えた、誰もが羨む理想の客が。住江の客で床夜の客に対抗できるのといったら、

高杉とかいう彼女の情夫くらいだろう。あれは確か父親が北だか南だかの町奉行だと聞く。住江はよく彼が自分にぞっこんだと自慢していて、尻に敷いているの間違いないかと留新達が陰口を叩いていた。

そこできてうははたと気がつく。もしや、住江の方に身請け話があるのか。年季が明ける前に廓を出るのか。それで気が急いでこんな事を聞いてきたのかもしいないと考えたが、すぐに心の中で首を傾げた。そういえば最近高杉が登楼したという話を聞いていない。もし身請けの準備で忙しいのだとしても、ぱったり来なくなるなんてことはそうそうない。見世の主人とも打ち合わせをしなければならぬし、懇意の茶屋や船宿にも挨拶が必要。廓の外だけでは身請けの支度は進められないのだ。「……ひくて。住江の年季明けは、再来年ではなかったか」

もしやこの前提自体が間違っているか。この正月が明けたら、住江は桐屋を出ていくのだったろうか。そう疑ってひくてに問うが、ひくては首を縦に振った。

「なら、今こんな話をしても仕方なからう。住江の年季明けまでは、お前えは住江の禿。諦めてもう一年と少し、堪えなんし」

「ああ……」

頷いたひくては、踵を返して大部屋の方へと戻ってい

く。その足音は猫のそのように小さくて、足袋を履ける禿を少し羨ましく思った。新造以上は足袋を履かない習わしだから、べたべたと足音はするし、冬は酷く冷える。先刻ひくて近づいてきていたのに気がつかなかったのも、あれの所為だろう。

しかし、ときてうは眉を顰める。立ち去る寸前のひく顔、喜びが滲んだあの顔が、どうにも引つかかった。自分が床夜の妹になりたいと主張していたらなれたという話をした後から、ほとんど変わらなかつたあの表情。あれだけ言われてなお希望を捨てない理由。住江が身請けされるでもないのなら、そもそも見世の主人達に「床夜の妹になりたい」と言うことすら出来ない筈だ

が。
(何事もなきやいいが……)

そう念じた途端、ぶるりと背筋に寒気が走る。忘れていた尿意がぶり返す。それできてうは自分がぼけつと突っ立っていた場所を思い出して、ようやくと厠の戸を開いて中へ入った。

四.

師走十三日の煤払いが終わわり、二十日に餅つきが行われると、正月は目の前である。禿達は年に二回しかない休日心を待ちにして浮足立っていたが、その禿達を抱え

る花魁のほとんどは、取り立てに来た掛け取り衆に支払う金の算段に苦心していた。

「うちには旦那がいてくれて良うおつした」

「ほんに、ほんに」

床夜の座敷には、彼女の上客の一人白沢しろさわが、昨夜から居続けと決め込んでいた。腕のいい医者らしいが不養生な男で、今も朝っぱらから花魁の酌で酒を過ごしている。だが、つけを払って今年を無事に終えられそうなのは彼のお陰なので、禿や新造はこそって彼をもてはやした。

「掛け取りの声も、自分の座敷に来るのでなければ、別に嫌なものでもありませんな。ああ、またどこぞの座敷に掛け取りでありんす」

「桐屋でいっち早く金を払い終えたのは、花魁でありんすな」

誇らしげに胸を張る禿を見て、皆がくつくつと笑う。廊下の外からは揉めるような声が聞こえてくるが、年の瀬の忙しなさを乗り越えた彼女達には、まるで他人事であつた。

「……そうは申されましても、住江花魁……」

その時、すがるような、ひととき大きな声が上がると、いつもなら聞き流す懇願、しかし呼ばれたその名に、皆は顔を見合わせた。

「……今、住江と言いせんしたか」

「これ、千夜の」

「けど花魁、あの住江が踏み倒すかもなんて……」

気を惹かれた様子の千夜のは、そつと廊下を覗こうとして床夜に止められている。だがその気持ちは分からな
いでもなかった。住江とて花魁だ。床夜ほどではなくとも、無心をする相手がいない筈がないのに。

「無心しなかつたのでありんしょうか」

「それはあるまい。前の年越しはあの高杉とかいいう旗本に払わせておつたらう」

「じゃあ振られた……」

かもしれぬ、と領いた千夜のの目はきらきらと輝いている。客の前だというのに禿と噂話に花を咲かせだした千夜のに、きてうは呆れて肩を落としていたが、ふと目の端に映った床夜の顔を見て、口角を引きつらせた。

「……千夜の。そのように喋るのはきつと口寂しいからであらう。田楽でも取つて来な」

「あ……あ……」

金を握らせた床夜は笑みを浮かべていた。部屋の中が冷えたように感じる。しまったという顔をした千夜のは、どたどたと廊下へ飛び出し、寒い寒いと騒ぎながら田楽を買いに走つていった。

「はは、床夜も怒る時は怒るんだね。怒つた顔もオツな

もんだ」

「お見苦しいものをお見せ申しした」

床夜はすました顔に戻つたが、白沢は嬉しそうに何度も頷く。

だが床夜が二回廻しに呼ばれて一度部屋を出た時、何か考えるような顔でぼんやりしたのを見て、きてうは首を傾げた。

「どうしなした、旦那」

「ん、ああいや、大したことじゃないんだが……」

奥歯にものが挟まったような言い方をする白沢に、すいと眉根を寄せて睨むように見る。そこまで言つては言いたいも同然であらう。もつたいぶらずに話せという気持ちをごめて見つめていれば、彼は困つたように笑つた。

「さつき、高杉様、と言つたらう。それはあの、お奉行の高杉様の御息、進二郎殿のことだらうかと思つてね」

答えを求めているようだったので、そうだと領いてやる。知り合いかと問うと、父親の方と、との返事。それから更に考え込むような素振りを見せるので、どうかしなしたかと問うと、彼は少しばかり声を嚙めて話し始めた。

「いやね、嫡男の進二郎殿と言えば確かこのほど、随分

と良縁の縁談が舞い込んで、その相手と祝言を挙げるという風な噂を聞いたものだから。少々派手な吉原遊びをしていたのが、近頃は大人しいとも聞いたから、てっきり花魁とは手を切ったんだとばかり……」

噂を聞いた、と言っているが、しつかりとした口振りだから、かなり確かな話なのであろう。気づけば身を乗り出すようにして聞っていた。

「祝言は……祝言は、いつ頃……」

「年が明けたら早いうちに、だったかな」

その答えにいいよ言葉を失う。この話を、住江がまさか知らない筈がない。先日の夜半のひくでの様子と併せて考えると、事は穏やかなものではなさそうだった。

誰かが階段を駆け上ってくる音がする。すわ住江の所に来た掛け取りかという意味もなく身構えるが、すぐに肩の力を抜いた。この音は、掛け取りではない。

「……私が気にかけていたことは内緒だよ」

小さく囁きかけてくる白沢に、声は出さずに頷いて。

顔を上げるや否や、襖が開いた。

「ああ寒かった。ちよいと白沢の旦那、外はついに雪が降りだしんしたよ」

飛び込んできた千夜のは唇を震わせて言い、買ってきた田楽を早速取り出した。そのうち床夜や禿も戻ってきて、田楽に手を伸ばしつつ、何のかのと騒ぎ始める。

住江の座敷の方から声が聞こえるかどうかは、もはや分からなくなっていた。

五.

江戸の冬は空っ風が頬に痛い、北の方から拐かされてきた誰かが言っていた。こんなにかさかさしては火事が起こるのも道理だと。しかし江戸生まれのきてうはこの冬しか知らない。家が埋まるほどの大雪など、この先もきつと見ることはないだろう。

「夏もいいけど、甘酒はやつぱり冬だね。知ってるかい、京の方では甘酒は夏の夜にしか売らないんだってさ」

冬の寒い時分にこうやって凍えながら啜るのが旨いのねえ、と禿に講釈を垂れているのは千夜のだ。彼女とて都に行つたことがあるでもなかるうに、どこのお客からの受け売りだか知れたものではない。

今日も今日とて花魁が奢ってくれた甘酒を啜って、きてう達は昼見世までの時間をのんびり潰していた。とりとした白濁を舌の上で転がす。喉がじわりと熱くなる。甘くねっとりしたそれを存分に楽しんで、きてうはのそりと立ち上がった。

「きてう、どこか行くのか」

「ん……ああ。ちよいとしし」

床夜に習った、客との宴席を中座する時のあしらい方を実践してみれば、千夜には思いの外受けた。けらけらと笑う声を背に、中庭に面した回廊へ出て、障子を閉める。初春の寒さに総身を震わせていると、少し離れた部屋の方から、声量は抑えながらも叱りつけるような声が聞こえた。

「いい加減にしな、高杉様だけがお客様じゃないんだよ」

声はお香のもの。場所は恐らく住江の座敷だろう。きてうは何でもない風を装いながら、少しだけ住江の部屋の方へ廊下を進んで、ある程度まで来ると、欄干に寄りかかって空を見上げた。

「ここんところ、毎日のようにお客様から苦情をもらうんだよ。昨日の御前崎様なんか、これじゃ留新を買った方がいくらかましたって仰せだったくらいなんだから」

姿の見えない雲雀の声に耳を傾ける。人の声まで聞こえてしまうのは致し方あるまい。

「お前、来年には年季が明けるだろう。最後のひと頑張りじゃないか。今更一人の男で身を持ち崩すなんて、花魁の名が泣くよ」

その言葉の後、襖の動く音が二度聞こえた。続いて、微かな衣擦れの音と足音が遠ざかっていく。

それからも暫くきてうはその場でぼけっと空を眺めていたが、恐らくは一人しかいないであろう座敷から声が

再び聞こえてくることはなく、いい加減凍えてきたので床夜の部屋に戻ろうかと伸びをしていると、住江の部屋で誰かが立ち歩く気配が感ぜられた。きてうが返しかけた踵をその場に縫い止めて窺っていると、ぼそぼそと何事か呟くような声が聞こえてきて、きてうは辺りに気を配りながら抜き足差し足で部屋の方へ近寄る。

「……進二郎様。ああ、嗚呼、進二郎様。他の女になぞやるものか。進二郎様、主様はわっちの、わっち一人のもの……」

引き笑いのような微かで甲高い、掠れた音が聞こえる。かさかさと鳴っているのは紙の音か。他にも何か物音はしているが、障子越しで当て推量をするにも限度がある。きてうは再び辺りを見回して、誰かが来るような気配がないことを確認してから指先をねぶり、慎重に障子紙へ押し当てた。逸る気持ちを抑え、じつくり押しつけると、じきに音もなく穴が空く。そこからそっと覗くと、ちょうど文机に向かっている住江の背中が見えた。

住江は文を書いているようだった。筆を持った右手を忙しなく動かしていて、衣擦れの音の合間にはひいーっ、ひいーっ、という引き攀った笑い声が混じる。それを認めたきてうは、そっと障子から離れて今度こそ踵を返した。

住江が何をやる気かは分からない。だが何やら剣呑な

気配はする。かつての八しほのように足抜けするならま
だいい。最悪この見世で無理心中でもされたら。初売り
を間近に控えるきてうにしてみれば、けちがつくような
真似をされる訳にはいかなかった。

「ん、お帰り」

「ああ、只今」

床夜の座敷に戻ると、中には千夜のだけがいた。禿は
どうしたのかと問うと、小間物屋が来たからと床夜に呼
ばれたそうだ。お前は行かなくていいのかと重ねて尋ね
ると、寒いから面倒だとのいらえ。千夜のらしいと思
うが、嗜好きで口の軽い彼女には、今は少しばかり居ても
らっては困る事情がある。そうか、と何でもないような
顔で頷いたあと、障子戸を一気に開け放った。

「うおつ、おいきてう何をする、やめい」

「臭いがこもつとる。どうせお前えしかいねえのなら、
風を入れようと思つてな」

「わつちを何だと思つとる。早う閉めい、凍え死ぬ」

「我慢しろ。でなければ大部屋にでも逃げたらどうだ」
「畜生、鬼かお前は……」

罵声を吐きながら千夜のが行つたのを確かめて、障子
を閉め、きてうは大急ぎで紙と墨を引っ張り出す。誰か
が戻ってくる前に書き上げなければならぬ。急いで墨
をすり、筆に染ませて紙に下ろす。走り書きだが、付け

文でもないのだから構わないだろう。用件をしたため、
相手の名を記し、折りたたんで、袂に投げ込む。

部屋を出ると、丁度住江の部屋から出てきたひくてに
行き会った。文を懐に入れていたひくては、こちらに気
づくと手をすり合わせながら、よう、と言う。軽く手を
挙げて応じ、お前も文を出しに行くのかと声をかけた。

「ああ、今日も高杉様への文だと。お前も文使いに用
か」

「まあな」

それなら共に行くか、と誘い、二人で連れ立って歩き
出す。かじかむ手に息を吹きかけながら、ところで、と
きてうは切り出した。

「前々から思つとつたがお前え、いくら違う姉のところ
の遊女だからつて、先輩への口の利き方をもう少しなん
とかしたらどうだ」

「敬うに値すると思つた相手にはそれなりの口を利く
さ」

「ほおー、わつちのことは尊敬できねえつてか」

「されたきゃそれだけの事してみろ」

「例えば」

「そうさな、じゃあこの文、代わりに持つていつておく
んな」

「そりゃ単なる使い走りだろが」

むしろここは、禿であるお前が率先してついでに持つて行きますと言うべきだろうと指摘すれば、やなこつたと舌を出してきた。それが四つも年上の先輩に対する態度かと睨むが、ひくってはどこ吹く風で。

「しかし寒いな……きてう、冗談抜きで持つていってくれんか」

「ふざけるな、わっちも本来なら大部屋か花魁の座敷に籠っていたいわ。……ああ、そうだ。なら、石拳で負けの方が、両方出しに行くというのはどうだい」

「ああ、それでいこう。こんな寒い中、外に出るのは苦行に等しい」

玄関に近づくとつれてひととき冷たい風が流れてくるのに耐えかねたらしいひくは、一も二もなくといった風に頷いた。しめた、と密かに握りしめた手をそのまま石拳にかこつけて構え、恨みっこなしの一回勝負だと笑うひくはの目を、探るように見据える。

「じゃーんけーん……」

ぼん。

「あつ畜生」

きてうが負けた。

悪態を吐くと、御愁傷様、と言いながらひくはが文と銭を差し出してくる。眉間に皺を寄せながらそれを受け取ると、ひくはは足取り軽く身を翻した。

「はっはっは、やはりわっちの読み通りだったな」

「読み、だと」

「きてうお前え、先刻から手を擦ってたよな。指が冷えてうまく動かんのだろ。それで鉄は出してくるまいと思つて、紙を出したのさ。引き分け覚悟だったが、お前えが石を出してくれて良かったわ」

鼻高々に種明かしをし、言うだけ言つて大部屋の方へ去つていくひくはの背を見送つて、きてうは踵を返した。

(引き分け覚悟、か……)

ひくはから受け取つた住江の文を懐深くに突つ込む。引き分け覚悟だったのも、相手が自分の望む手を出してくれて良かったと思つているのも、自分の方だと思いがら。

もし、ひくはのあの賢しさも、こちらの読みの内だったと教えてやつたなら。詰めの甘いあの禿は、臍を噛んで悔しがらうか。その顔を見てみたい気がするが、それをしてしまつてはひくはと同じ轍を踏むことになる。この文は後で、人目がない隙を狙つて竈にでもくべるとしよう。

表に文使いの姿が見える。ちょうど他の遊女からの文は粗方預かつた後で、他に人はいない。これは都合がいいと思いながら声をかける。

「ちよいと。この文もお願ひしんす」

「はいよ姐さん。どこの旦那にだい」

「ああ、わっちじゃねえのさ。住江姐さんからの預かりものでね……」

懷でなく袂の中から、文と、さつきひくてから受け取った銭を取り出す。少しばかり緊張で震える声はあたかも寒さのせいかのように装って、それらを文使いに手渡した。

「……旗本の、高杉進二郎様へ」

六。

曆の上では春になつても、江戸の寒さはぬるむどころか一層厳しさを増したようだった。

それでもどこぞで咲いたらしい梅の香が鼻をくすぐるようになった頃、その香りと共に、医者おとどの白沢が床夜の下を訪れた。

「……きてうを名代に」

久方振りのお敵おとどの訪いを告げた二階廻しの男に対し、床夜は短くそう言い放つに留まった。姉女郎に名指しで代理を任されたきてうはやれやれと立ち上がり、温かい座敷を後にする。

二階廻しに誘われるままに凍てつく廊下を進む。上草履の鼻緒が、冷えた足の指に擦れて痛い。分厚い草履の

立てるばたばたという音を疎ましく思っていると、同じ音がもう一つ、向かいからやってくるのに気づいた。

「あ……」

廊下の向こうから現れたのは、禿を連れた遊女で。よく見れば、それは住江とひくてであった。目が合つて寸の間どきりとするが、努めて平静を装う。

相手は曲がりなりにもこの見世の二番手だからと、きてうは二階廻しと共にそつと脇に避けて道を譲った。静かに目を伏せ、住江が通り過ぎるのを待つ。だが住江はゆらりゆらりと身体を揺らしながら歩いていて、眉をしかめたひくてが手を引いているが、なかなか通り過ぎて行かない。すれ違いざまにその顔を窺えば、住江はうなじまで赤くしていて、熟柿臭い息を吐きながら、よたよたと去っていった。

「何なんだいありやあ……」

「気にすんな。花魁は近頃、ずつとああさ」

二階廻しは首をすくめ、いいから行くぜとまた歩き出す。住江の去つた方を眺めていたきてうは、その言葉を受けて再び彼の背を追った。

「旦那、失礼いたします」

案内された一室に入ると、白沢はこちらを見るや否や、あちゃあ、とでも言いたげに眉を下げた。二階廻しはすぐになくなり、二人きりになった部屋で、白沢は

がしがしと頭をかく。

「……床夜、おかんむりかな」

「あい、相当に」

「やっぱりか……」

はあ、と肩を落とす白沢に、特に慰めの言葉はかけてやらない。振られたくなくば、足繁く通うしか男に術はないのだ。それを怠つた白沢に、同情の余地はない。

「……今年は年明け早々、風邪をひいた人が多くてね。

ほら、先月の半ば頃に、何日か暖かい日が続いたろう。あの後また寒くなったから、そこで調子を崩した人が増えたんだ。毎日患者が入れ代わり立ち代わり、私も休む暇がなくてね。決して床夜のことを忘れていた訳じゃないんだが、どうにも忙しさにかまけてしまつて」

言い訳がましい白沢の言は適当に聞き流して、火箸を手取る。それで火鉢の炭を弄っていると、そういえば、と彼は少し声の調子を変えて言った。

「先に話した、高杉様の所の進二郎殿だけどね。先日、めでたく祝言を挙げられたよ」

火箸を操っていた手が止まる。どくりと胸が強く打つ。動揺を気取られないようにそろりと目だけで白沢を見ると、彼はあぐらをかいた膝に頬杖をついて、穏やかに笑っていた。

「お相手は氣立てのいい、大人しい娘さんだったよ。進

二郎殿は押しに弱いところがある方だったけれど、しっかり夫を立ててくれる方を娶られて、随分男として自信を持てたみたいだ。祝言前とは見違えるように、近頃はお勤めにもはりきつておいでだとか。高杉様も、ようやく息子が跡取りとしての自覚を持つてくれたと、喜んでおられたよ」

聞いてもいないのに教えてくれるのは、どんな意図があつてのことか。きてうは適当に相槌を打ちながら内心身構えるが、あるいは単なる暇つぶしかもしれない。

そうだ、白沢が何かを知っている筈がない。住江の手紙はあの後誰にも見られないように燃やしたし、自分が書いた方の文には名は書かなかつた。後ろ暗いことがあるとどうにも疑心暗鬼を生じてしまふ、少し肩の力を抜こう、と溜息を吐こうとしたところ。

「……進二郎殿に文を出したのは、お前じゃないかい」ひゅつと、喉の辺りが音を鳴らした。

「ああ、いや、別に責めようという訳ではないよ。むしろよくやつたと思つている。あの密告のお陰で、進二郎殿は花魁と完全に縁を切る踏ん切りがついたんだからね」

白沢は身体の前でぶんぶんと手を振り、きてうの恐れのようなことは何もないと請け負う。それできてうが身の強張りを少し解くと、白沢はほつとしたように話を続

けた。

白沢が言うには、進二郎は、切れ状を書く為にもう一度吉原へ赴くべきかと悩んでいたそうだ。しかし吉原から届いた謎の文に、住江が貴殿に執着しているようだと書かれているのを読んで恐ろしくなり、同じく廓通いをしている白沢に相談を持ち掛けたのだという。

「それと、あの文を見たのは進二郎殿の他は私だけだ。相談を持ち掛けられて、そういえば君が彼の縁談にいやに食いついていたなあと思ひ出してね。進二郎殿は誰から送られてきたのか気にしていたけれど、お互いの為にも知らない方がいいだろうと論しておいたよ」

白沢はもはやきてうが文の差出人と決めつけた口振りで。だがきてうもここまで確信されているのならば、腹をくくった。

「お願い申しんす。この事はどうか、他言無用に」

「分かつているよ。あの文も燃やした。私が火にくべたから、心配はいらない」

それを聞いてほっとする。もし何かの拍子にあれの存在が明るみに出て、自分が書いたものと知れたら、住江に何をされるか分かつたものではない。だがあの文が隠滅され、進二郎が廓通いをやめた今、自分が手を回したことも知れることはあるまいと、きてうは胸を撫で下ろした。

「聞きたいことはそれだけかな。なら、この話はこれで終わりにしよう。他の誰かに聞かれても困るからね」

「白沢の旦那……恩にきんす」

「いいってことさ。それよりきてう、お前、もうすぐ水揚げなんだってね」

少し抑えたような声だったのが、話が終わるや否やいつもの明るい調子に戻る。水揚げ、すなわち破瓜の相手となる客を取る日は、もう数日後に迫っている。あい、と応じれば、いよいよだねえと感慨深げに何度も頷かれた。

「私は床夜の客だから、お前を鼻根にはしてやれないけどね。お客を紹介してやるくらいならできるから、頑張るんだよ」

「ありがとうございんす」

白沢の申し出に、深々と頭を下げる。思えば新造出しを始め、彼には随分と世話になってきた。本当なら自分の客になってほしい気もするが、客を紹介してくれるのも十二分にありがたい。彼の知り合いなら、きつとはずれも少ないだろう。

「私の懇意にしている薬種問屋の若旦那に、今度、お前の事を話してみるよ」

「薬種屋の若旦那……」

「そう。なんとなくお前と雰囲気が似ていてね。彼なら

気が合うんじゃないかと思うんだ」

白沢が懇意にしている店ならきつと大店だろう。早くにお大尽のお客をつかせられるに越したことはなく、断る理由もない。

「お前より七つ上だったかな。名を、高松屋光太郎というのだけれどね」

光太郎様、と舌の上で転がした名は、どこか懐かしい響きを持つていた。

第三部 彼の女の事

一.

軋む畳に、獣のような吐息。闇の中、時折揺らめく行燈の明かりだけが頼り。

「嬉し野……嬉し野……」

目の前の男に名を呼ばれて、応えるように背へと手を回す。廓に入ってから三つ目の名。この春からこの見世の看板花魁となったのを機に主人から新たに与えられたそれは、今自分を抱いているこの男が誰よりもたくさん呼んでくれたお陰で、一年も経たないのにもう耳に馴染んでいた。今ではきてうと呼ばれてもすぐに答えられるか自信がない。少なくとも、とめ夜ではもう無理だと思

そういえば吉原へ来る前、自分が呼ばれていた名は何だったろうか。記憶にある母は火事で亡くした夫と息子の名ばかりを呼んでいたし、その母の死後引き取ってくれた父の遠い親戚だという家族も自分の名など呼んではくれなかつた。だからここに売られてきた頃には既に己の名前というものは忘れかけており、とめ夜という名を新たに与えられた時は却ってほっとしたのを覚えて

「嬉し野、もう……」

「光様、光様、わっちも、わっちも」

頭で別のことを考えていても声は勝手に漏れてくれる。気づけば、果てる光太郎と共に身体を震わせていた。ぼぼを締めめぐつと仰け反る。ついでに背中に爪を立ててやると、肩口に顔を埋めていた彼が喉を震わせたのが分かった。

「はあ……」

精を吐き出しきつたらしい光太郎が身を起すと同時に、穿たれていた楔が抜けていく感触がして、小さく息を吐いた。追って嬉し野も身を起こし、彼の寝支度を手伝ってやる。大店の坊ちゃんのくせに、そういう事をされるのは気恥ずかしい性質だ、と彼は以前言っていたが、なるほど未だにそわそわと目をそらす辺りあの言は嘘ではなかつたのだと思ひ知る。知ったところで、やめ

てやろうという気にはならなかったが。

「もう寝ようか」

お前も疲れたろう、と頬を撫でてくる光太郎だったが、嬉し野はその手をそつと両手で包んで、鼻と唇を擦り寄せるように顔を動かした。

「でも、寝て覚めたら主様はまた帰かえってしまうんでありますしよ」

ならば眠りたくなどない。そう強請ねだれば、行燈の灯に照らされた光太郎は小さく笑んで、では眠るのは止そうと言った。布団に入つて指を絡めて、互いにただ、静かに寄り添い合うだけ。部屋の外からはすすり泣きのような遊女の嬌声が聞こえるが、この町ではそんなもの、秋の鈴虫とそう変わりはない。あれのせいで眠れないなどということも、血の道か何かでよほど気が立っている時でもなければまずなかつた。

「今宵は月が明るいねえ……」

「ええ、ほんに」

言われ、今は閉めている障子戸の方を軽く見やる。確かに、今夜の月は随分と明るいようで、障子には欄干の影が映し出されている。今頃仲之町は、きつと満開の桜と相まって息を飲むほどの景観となっているに違いない。道中の時は辺りが登楼の灯で明るすぎて月が霞んでいるし、さりとてこの刻限では仲之町へ続く門は閉まっ

ているだろうから見るとは能われないのが少し残念だった。

「仲之町はきつと今時分、とみに美しい眺めのだろうね」

不意に、光太郎が呟く。ほう、と小さく溜息を吐いた彼は、嬉し野の目を見ているようで見ていない。きつとこちらの瞳を通して、月に照らされた桜の咲き誇る大通りを見ているのだろう。だがそれは嬉し野とて同じことだった。光太郎の瞳の中に、月と花が見える。

光太郎とはこのように、ふとした時に考えることが同じであったり、同じ言動をしたりすることがしばしばであった。光太郎を自分に紹介してくれた人もきつと気が合うと思う、と言っていたがまさしくその通りで、閨の相性はさほどではないものの、共にいて彼ほど居心地がいい相手は他になかつた。

「そりゃあもう、えも言われぬ風情がありんすよ」

「そうだろうねえ。お前と見たいものだ」

「そんなら主様、江戸一、否、この日の本一の大商人になつておくんまましよ。それで弥生の十五夜に大金積んで吉原中を買ひ取つて、仲之町の灯籠の灯を全て消させて。そうすりゃ生きながらにして、西方浄土に辿り着けるといふもの。江戸中の男が光様に憧れるでありんしよ」

「月に桜に、お前という美女か。帝の位も何にかわせん
といった心地だろうね」

「ならわっちゃあ、吉原の四つの稲荷に、ことごとく
この事を申しんしようかねえ」

昔の太夫は詩歌漢文にも通じていなければならぬとい
う話だったが、昨今の花魁はそこまでの漢才かみづえを求めら
れることはない。それは客の側にも言えることで、嬉し
野の何気なく口にした「憧れ」という言葉で光太郎が更
級日記を思い起こしたのは当然のことではなかった。そ
れでも光太郎は嬉し野の一言でそれを引き合いに出し、
あまつさえ嬉し野がそれを理解するであろうことに疑い
を持たなかった。つまり、二人の仲はそういう事だっ
た。

この打てば響くような居心地の良さは今に始まったこ
とではなく、むしろ初めて言葉を交わしたその日から、
嬉し野と光太郎は一事が万事この調子だった。嬉し野が
光太郎をそのように仕込んだ訳ではない。しかしだから
こそ、彼女はこの男を見込んでゐる。

己をこの曲輪まがらみから連れ出させる、都合のいい男とし
て。

このような言い方をするとなかなからず誤解を招きそう
だが、嬉し野は決して光太郎のことを軽んじている訳で
はない。彼の愛を蔑ろにする気もない。ただ、彼の才覚

を引き出し、彼の思いを成就させてやる代わりに、自分
を手放させるまいと画策しているだけで。

嬉し野がこの苦界に身を沈めたのは、もう一昔も前の
ことになる。桐屋に売られて凡そ十年、彼女は数々の遊
女を、その行く末を見てきた。

病に倒れた者。河岸見世に流れていった者。折檻で命
を落とした者。男を見る目がなく、間夫に散々責がされ
た挙句捨てられた者。

嬉し野がまだ幼い禿だった頃、この見世にいた八しほ
という名の振袖新造は、面倒を見てくれていた姉女郎の
客に惚れて身を滅ぼした。客は己の敵娼あいかたしか見ていなか
ったし、八しほ自身その相手の男に見合う遊女ではなか
った。身の程も知らずに先走り、足抜けをした咎で見世
の住み替えを余儀なくされ、心を病んだ。

昨年々季明けを迎えた住江という花魁は、これまた男
を見る目がなかった訳ではなかったが、己に合っている
とは言えない男を選んでしまった。廓では花魁の尻に敷
かれるのも一興と思えるかもしれないが、親兄弟、ある
いは家の者の眼がある所では自分を旦那様と立ててくれ
る女を側に置きたいと思うのも自然のことと言えよう。
惚れこませきれずに縁を切られ、何度も文を出していた
のを見たが、勤めを終えても見世に残って番頭新造をや
っているところを見ると、あれきり梨の礫だったよう

だ。

無論、何とか無事に廓を出た者もいなかった訳ではない。昨年春には、かつて嬉し野が世話になった床夜という花魁が、年季明けを待たずに身請けされた。麗らかな春の日差しが降り注ぐ中、帯を後ろで結んだ彼女の乗った駕籠が吉原から出ていくのを、他の見世の禿さえもが見送っていたのは、吉原中の語り草となった。

あれほどまででなくていい。ただ、後の不安がなるべくないままに、この檻を出たい。女一人でやっていけないこともないだろうが、一度鳥屋にもついた身だ、別段丈夫な方ではないし、運よく花魁になれたのだから、これを活かさない手はない。

一目見た時に、気の合う、長続きしそうな男だと思った。圍の相性が特別いいとか、客の中で一番のお大尽だとか、誰よりも羽振りがいいとか、そういう事はなかったが、ただ楽だった。燃え上がるような熱情や焼け付くような執着がないからこそ、この男にしようと思った。

欲しがりそうな言葉を与え、弱っている時に支え、商いで忙しい時の無沙汰は責めないでやった。信頼を勝ち得た今も、金を搾り尽くすような真似はせず、立派な大店の若旦那として彼を育て上げることに心を砕いている。

首尾は上々。あともう二、三年も今の調子で彼が商い

を続ければ、彼が自分を身請けしても、彼の家が営む菓種問屋は左前にならずに済む。自分はその若女将として、この廓を出た後の地位を確かなものとする。

(この企みを知ったら、この人は怒るだろうか)

うつらうつらと、瞼が落ちそうになってきている光太郎を見やりながら嬉し野は考える。怒る、かもしれないし怒らないかもしれない。利用したのかと憤る姿、それでもいいさと受け入れてくれる笑み、どちらも容易に思いつける。

だがどちらにせよ、知らなければいいだけの話だ。

それが他人の手によって作られたものだとならなければ、その幸せを享受することに疑念を抱くこともあるまい。

どうせなら、一生騙し通してやろう。

何も知らずに幸せになればいい、と、嬉し野は目の前の閉じ切った瞼を親指の腹でもって緩やかに撫ぜた。

二.

懐かしい夢を見た。狭い鳥籠に囚われていた頃の夢。

いつの間にも目を閉じていたのだらうと軽く目を擦ろうとしたら、肩にそつと手がかかった。

「眠いなら横におなり。まだ無理をしない方がいいだろう」

振り返った先には、夢よりもほんの少しだけ精悍さの増した顔つきをした光太郎がいた。慈しみに満ち溢れた手付きで寝かせようとしてくる彼に従い、起こしていた身体をそのまま布団に横たえ、膝掛代わりにしていた掻い巻きを首元まで引き上げる。手の中にあつたはずの湯飲みはいつの間にもやら少し離れたところにある卓袱台の上で、光太郎のものと仲良く並べられていた。

「今日は白沢先生の往診の日だ。じきにいらっしやるだろう。何事も無いといいね」

「ええ……」

「私は少し留守にするけれど、先生の言い付けを守って、養生しているのだよ」

そつと前髪を梳くように額を撫でて、光太郎は部屋を出ていく。その姿を目で追って、襖が静かに閉じられたのを見届けてから、ゆるゆると首を反対に巡らせて、冷えるからと閉められてしまった障子に映る紅葉の影をぼんやりと眺めた。

ただ寝ているのは暇だから、貸本屋から何か借りるか、せめて鮮やかに色づいている庭の木々を眺めるくらいさせてくれるといいじゃないかと、文句を言っただけでよかったかもしれないと、今なら思う。しかし近頃、時折何かに追われているような顔で青ざめている光太郎を前にすると、ろくに言葉も交わせなくて。

光太郎が持ち去っていったあの湯飲みの方がよほど睦まじく寄り添っていたと、小さく溜息を零した。

(ようやくと、真の夫婦になれたのに……)

そう、彼女が今いるこの部屋は、新吉原江戸町二丁目の桐屋の一室ではない。ここは日本橋の薬種問屋、高松屋である。

幼少のみぎりに吉原へ売られて十余り四年。彼女は遂に、あの重厚な大門の中へ戻らないことを許された。火事や店が焼け落ちた時なんぞにも外に出ることを許されたことはあったが、いつかは必ず戻らねばならなかった。だから、もうここを通り抜けなくてよいのだと思いつつながら駕籠に揺られて吉原を出た時は、凶らずも強張っていた肩から力が抜けた。

今の彼女の名はお豊とよという。これからは豊かで実りある生をと、光太郎が考えてくれたそれは、彼女がこの世に生を受けてから五つ目の名だった。幼い頃にあの薄汚い母から付けられた名、廓で称した三つの源氏名は、既にこのお豊の名に上塗りされている。

廓から連れ出してくれた光太郎は、桐屋の主に示した証文の通り、お豊を妻として娶ってくれた。証文には妻にすると言くのが通例だが、必ずしもその通りにしなければならないということもない。妾にしようと野に放とうと、それは身請けした男の好きにして構わない。だが

光太郎は、廓立ちの彼女を正妻としてこの高松屋の若女将に据えてくれた。自分の両親にもきちんと話をつけておいてくれたようで、吉原育ちの阿婆擦れと謗られることもなく、むしろ実の娘のように迎え入れてくれ、今日こんにちまで嫌な思いはほとんどしていないと言っている。

順調だと思っていた。それなのに近頃、光太郎の様子はどうにもおかしい。今だって、医者いしやの往診があると知っているにもかかわらず、そそくさと出かけていってしまった。商売の寄り合いでもあるのならまだしも、どうやら私用であるらしいのがお豊の不安を煽る。

他に女でも作ったか。身持ちの堅い光太郎に限って有り得ないとは思うのだが、夜はもうとんとご無沙汰だし、自分はこのところ床に臥せってばかりだし、浮気をされかねない条件は揃っている。

(この子がかま鏝いになると思っただけ……)

まだ目立たない腹をそつと擦る。

そこに宿る命が光太郎の種であることは疑いようもない。高松屋に来てから何度かは月のものがあつたし、それは光太郎も知っている。懐妊を知らせた時は飛び上がって喜んでくれた。男でも女でもいい、無事に生まれてくれればそれで、とぐずぐず泣き出した時は流石に気が早いと笑った。それなのにその直後から、何かに怯えるようにこそそし始めた。

光太郎が何を考えているのか、お豊にはもう分からなかった。

「ご新造さん、白沢様がおいでで」

「お通しして下さい」

店表から手代がやってきて、声を掛けてくる。そのやり取りに、何とはなしに廓にいた頃を思い出してしまふ。長年染みついたものはそうそう抜けないものだと思ふ。嘲しつづ、要らぬ考えを振り払った。

「ああ、お豊さん」

「白沢様」

手代に案内されて入ってきたのは馴染みの医者だった。高松屋のお得意で、お豊にとっては廓時代、光太郎を自分に紹介してくれた張本人でもある。

「その後、身体の具合はどうだい」

「はい、お陰様で。白沢様が仰っていた通り、温かくして、卵を食べていたら、随分よくなりました」

「そうか、それは良かった」

手代が出て行き、すぐさま問診が始まる。そのひとつひとつに正直に答えながら、この男は真面目に仕事をしている時はこんな顔をするのだなと、何とはなしに改めて思つた。別にその顔に惚れたということはない。だがまだお豊が廓にいた頃、桐屋に通い詰めていた白沢は、もっと相好を崩して、肩の力を抜いていたように思ふ。

どちらが真の顔なのかは分からないが、よくよく考えると、色里を訪れる時の顔と、医者として振る舞う時の顔が違うのはさもありなんという気がする。同じである方が却って気味が悪い。

「喉の腫れも引いたようだし、取り敢えずは大丈夫そうだね。卵は滋養があるから、これからも摂り続けるといい、お腹の子もきつと喜ぶ。ただ、過ぎたるは及ばざるが如し、だ。食べ過ぎもよくないからね」

「いくつくらいがよいのでしょうか」

「一日に一つか二つか。それ以上食べてはいけないという訳じゃあないが」

「頷きながら白沢の言うことを覚える。多く食べた次の日は食べないというのも手だ、と言われ、成程と相槌を打つ。

「そんなところかな。他に何か、気になることはあるかい」

「気になること……」

「別に身体の具合や滋養のあるもの話以外でもいいんだよ。最近気掛かりなこととか、思い悩んでいることとか。お母さんが気落ちしていると、お腹の子にもよくないから。何か吐き出したいことがあれば、私でよければ聞かせてもらおうよ」

無理強いはしないが、と最後に言い添える白沢を見

て、この顔は以前にも見たことがあるな、と思った。廓にいた頃のことだ。墓まで持つていくつもり秘密をそつと暴かれて、しかし自分も片棒を担ぐと言ってくれたあの時の。あの時の事は未だに誰かに漏らされた様子もなく、彼にすら相談してもいいかと、一度伏せた目を白沢に戻して、口を開いた。

「……光太郎さんが、近頃、妙なんです」

そう口火を切ると、白沢がひとつ、瞬きをした。

「気づくとお店にいないくて、寄り合いに出ているのでもないらしくて。たまに私の具合を見に来てくれた時も、あまり長居はしてくれず……今日も、ほんの四半刻前まではここにいたんですけど、すぐにどこかへ行ってしまう。丁度、私が身籠った頃からなんです。一体どこで何をしているのか……」

「……本人に、聞いてみたことは」

「ありません。どこか張りつめた気配のあの人に何をしているのか聞いたりしたら、何か取り返しつかないことになりそうで……思い過ぎだといいですけど」

そうは思いながらも、只事ではない何かを光太郎が抱えているのをお豊は確信していた。何せあれだけ気の合った伴侶だ。何を隠しているのかは分からずとも、これが杞憂でないという事は疑う余地もない。

もし、もしも、万が一。他の女に、光太郎を取られた

のだとしたら。彼に限ってそんなことはないと思うし、今や実の親子のように振る舞ってくれている舅と姑が自分達の離縁や妾の存在を許すとも思えないが、それでも。もしも何かまかり間違つて、高松屋の嫁の座を奪われたら。

（これまでの全てが、水の泡になってしまふ）

これまでなら、こんなにも不安になることなどなかった。廓にいた頃なら、いっそ光太郎を諦めて、彼に代わる他の男を見繕うという手もあった。しかしあの棲を出て、大店のお内儀になってしまった今、自分にはもう光太郎に縋る以外の術を持たない。

こうならないよう、光太郎は確実に落とす筈なのに。念入りに付け込んで、とろかせて、ぞっこん惚れ込ませたと、思っていたのに。

（駄目だったのなら、私は、どうすればいい）

ぐつと眉間にしわを寄せる。

「……大丈夫だ」

ふ、と目の前に影が落ちる。いつの間にか俯いていた顔を上げると、穏やかに笑んだ白沢がそこにいた。

「落ち着いて。心配しなくても、大丈夫だ。それでも怖いなら、きちんと彼に聞けばいい。どこで何をしているのか。どうしてそれを隠すのか」

「……言えないと、言われたら。それか、聞きたくない

ようなことを、言われたら」

「誠心誠意問うても答えないようであれば、それは余程の理由があるのだろうし、そこは信じて待つていてあげなさい。それから、彼は一途な男だよ。安囲いの女の所へ通うとか、そんな器用なことができる好色漢じゃありません。私が保証しよう」

そう言つて白沢はとんと己の胸を軽く叩いた。その仕草に、知らず知らずのうちに力のこもっていた眉間がふわりと緩む。そうだった。自分に彼を紹介してくれたのは、他でもない目の前のこの男であった。

「……ありがとうございます、先生。今度、それとなく聞いてみます」

「うん、お豊さんが聞こうと思えた時にそうしなさい。なに、彼も近く人の子の親になる自覚くらいできていよう。そうそう妙なことに首を突っ込んでいやしない筈さ」

そうだ、光太郎は、この子がこの身に宿った時に、あれだけ喜んでくれたではないか。自分やこの子や、あの気の優しい二親を悲しませるような真似のできる男ではない。そんな男にしたのは、無論舅や姑であるが、その一端は自分も担っている筈と自負している。

近いうちに隙を窺つて、問い質してやろう。そう腹を括ると、まだ聞いてもいないのに肩の荷が下りたような

心地がして、お豊はふっと笑いながら溜息を吐いた。

三。

とはいえ、暫くは何も聞くことができなかつた。それは秋口に罹った風邪が未だに尾を引いて床を払えないでいるお豊を光太郎が見舞う回数か日を追うごとに少なくなつていったからでもあり、たまの訪いにもあのどことなく何か心に気掛かりを残しているかのような顔を引つ提げて来られて、まだ今日はその時ではないとお豊が内心言い訳をして聞くことから逃げた為でもあつた。

そんなことが何度も続いて、冬も近づいてきたある日のこと。

その日、外から帰ってきた光太郎は少し様子が違つていた。どこか心ここにあらずであることに変わりはないのだが、どうにも気掛かりで落ち着かないといった今までとは違い、以前のような落ち着きを取り戻して、単にただ物思いに耽つているように見えた。その物思いは何とも言い難い表情で、嬉しいのだから苦しいのだから、お豊には判別できなかつたが。

それでも何となく、今日は聞いてもいいかもしれないと思つて、お豊は夕餉の際、何気ない素振りでも口を開いた。

「あなた、何かありましたか」

「……そう、見えるかい」

「ええ。良いことか悪いことかは、分かりかねますけれど」

「そうか」

ここで一度応酬が途切れる。光太郎が汁物をすすつたからだつたが、お豊は寸の間、これではぐらかされてしまふだろうかとひやりとした。

光太郎が汁椀を置く。右手にはまだ箸があつて、左手に再び飯茶碗を持ち直す。それから米に箸を伸ばしかけて、一瞬の逡巡が見えた後、やめて、茶碗と箸を置くと、湯飲みに手を伸ばし、まだ湯気の立つ中身を静かに眺めた。

(……あ)

湯飲みに彼の手が伸びた時点で、お豊は密かに察した。これは、きつと、話してくれる。

「……お前には、いつか話さなければならぬとは、思つていたんだが」

指を温めているのか、はたまた手持無沙汰なのか、中の茶を飲むでもなくじつと水面みづなを見つめて湯飲みを錐揉みする光太郎。その語気の弱さから、お豊はどこか言ひ様もない不安を覚えた。

やはり外に女がいるのか。もしかしたら、妾腹の男児がいるとか。その子を養子として引き取りたいとでも言

われたら。

もしそうならば、良妻として取るべき行動はひとつだ。何も言わずに頷いて、どこの馬の骨とも知れない女の子供を、我が子のように慈しみ育てる、それだけ。葉種屋の嫁のくせにひと月近くも臥せていた自分に、他に取れる手は無いに等しい。

大丈夫だ。それならまだ、耐えられる。生さぬ仲、継しい仲の子を、我が子と共に育てるくらいなら、きつとできる。それでもほんの僅かに身構えて光太郎の言葉待つが、彼の口から飛び出した言葉は予想だにしていなかったものだった。

「私は、この家の本当の息子ではないんだ」
は、と微かに息が漏れた。

腿の上で重ねていた両手がほんの少し揺れる。未だ湯飲みの中に視線を落としている光太郎を凝視する。

今、彼は、なんと。

「私は葉種問屋高松屋の嫡男ではない。お父つあんとおつかさんとは、どちらとも全く血の繋がりが無い。養子なんだ」

養子。その言葉を聞いて、お豊は詰めていた息を吐き出した。てつきり幼い頃に本物の光太郎を殺して成り代わったとでも言うのかと思つた己を叱咤する意を込めて、目の前の彼に気づかれないようにそつと脹脛ふくらばきを抓

る。

「宝曆の初めの頃だ。私はこんな日本橋なんて繁華なところではない、江戸の外れに住んでいてね」

光太郎の静かな昔語りが始まる。お豊は黙ってそれに耳を傾ける。

「当たり前だが、その頃は今とは比べものにならないような暮らしをしていた。父と、母と、妹が一人。父は入り婿だった。父は母に頭が上がらなかつたけれど、とても優しい人で、家のことはみな父が一人で取り仕切つていた」

光太郎は淡々と、それでいて噛み砕くような話し方をした。何を噛み砕いているのか、誰の為に噛み砕いているのかは、やはりお豊には分からなかつたけれど。

「母は……何というか、我儘な人だった。周りが自分の思う通りに動かなければ不満で、いつも家族が自分の気に入るように振る舞わないと許せない人だった」

「はあ……」

「店や家のことはみな父に押し付けて、母は日がな一日芝居を観に行つたり、小間物屋をうろついたり、好き勝手して過ごしていた。父が稼ぐ端から母が湯水のように使うものだから、あの頃の私達はいつも飢えていたよ」

その頃のことを思い出しているのか、眉をひそめて語る光太郎に、ろくな女ではなかつたのだな、とこちらま

で気分が悪くなる。胸に澱が溜まるような心地がするのは、思いつく人がいるからか。

「ずっと、逃げたいと願っていた。けれど、逃げる術も持たなかったし、父のことは好きだったから逃げられなかった。私が逃げれば、その分父が虐げられることは目に見えていたからね。まだ幼かった妹も、その歳の頃ではできるはずもないことを命じられては詰られていたから、私が一人で宛もなく逃げることなんてできなかつた。そう、思っていた」

そこまで話すと、光太郎はそつと湯飲み口に口を付けた。ほとんど飲んだ様子はなかったから、本当に唇を湿すだけのほんの僅かな量を啜つたのだろう。

「……十六年前のことだ。冬の、空っ風の吹く、寒い日だった。近所で火事があったんだ。私と父は丁度出先でそれを聞いて、慌てて帰った。家には母がいなくとも、妹がいた筈だったからだ」

母はどうせまたどこかで遊びほうけていると思つていたし、心配はしていなかった、と光太郎は零す。深い溜息と共に。

「家に戻る道中、どうもこれは火の回りが早いということに気づいた。家の方からどんどん人が逃げてくる。すれ違う人の一人が、あんたも逃げた方がいいと言つた。近所の人だった。私は逃げたかったがそれでも父は戻ろ

うとしたからついていった。だが、私達が家に辿り着くことはなかった」

「何故……」

「家に着くよりも先に、火の手に阻まれたんだ。家が燃えたことは明らかだった。私は父が諦めて逃げるものと思つたから、すぐさま踵を返した。しかし後ろから追ってくる気配がない。不思議に思つて振り返ると、父は、今まさに燃え盛っている長屋のひとつに飛び込んでいくところだった」

ぎゅ、と光太郎が湯飲みを強く握る。指先が白くなっているのを見て、お豊が思わず手を伸ばして湯飲みを取り上げ、緩くその手を握ると、光太郎はふと笑んで、お豊の手を慈しむように優しく撫でた。

「私は立ち竦んで何もできなかった。父が何を思つてその長屋に飛び込んだのか分からなかったから、とにかく早く出てくるよう呼び掛けたんだが、火の勢いが強くて長屋には近づけそうもなくて。その場で暫く右往左往していたら、中から父の叫ぶ声が聞こえた。どうしたのだろうと思つて戸口だったのであろう辺りから中を覗いたらね、父は中から、当時の私と同じくらいの年の頃の少年を、引きずり出そうとしているところだったんだよ。あの時は驚いた。何があつたのかは知らないが、何かしら逃げ遅れているうちに火が回つたんだらう、その子は足

に膝の辺りまでの真つ赤な火傷を負っていて、歩けないらしかった。父はその子の両脇に手を突っ込んで引きずりながら出て来ようとしていたが、あまり力のある方じやなかったから苦戦しているようだった。近所だったからその子とも知らない仲ではなかったし、私も何とかしたかったんだが、如何せん火に阻まれて近寄れない。どうしたものかと躊躇っていたら、次の瞬間、長屋が崩れ落ちて、二人の姿は見えなくなった」

喉から意味のなさな音が漏れる。お豊の手を擦る光太郎の手は、いつの間にか止まっていた。

「そこからどう逃げたかは覚えていない。人の流れを辿ったのかもしれない。気づいたら私は、同じように焼け出された人達と一緒に、寺で世話になっていた」

そこに母はいなかった、と光太郎は言った。その声音は、静かだが穏やかではなかった。

母も妹もおらず、知っている人のいないそこは、どうやら光太郎の生家からは随分離れた所にある寺だったらしい。そこで光太郎は炊き出しの手伝いなどをして過ごした。本来ならば母達の消息を求めべきだったが、彼はそれをしなかったという。

逃げられるかと思ったんだろうなあ、と彼は独りごちた。

「父がいなくなつて、母はきつと荒れた筈だ。綺麗だと

褒めてくれる男を、綺麗になる為の着物や簪を買う金子を稼いでくれる人を、都合のいい奉公人を失った母が次に寄り掛かるのは、きつと私に違ひなかつた。嫌だつた。あの人の元に戻るのが嫌だつた。いっそ口入れ屋でどこか住み込みの仕事を探して、こちらから行方を眩ませてしまおうかと思つていた矢先、出会つたのが、今の父と母だ」

その当時高松屋夫妻は、その時の火事によつてではないものの息子を亡くして、意気消沈していたそう。火事とは無関係だつたから店も問題なく、寺へは火事見舞いの寄進をしに來たらしい。だが折悪く住職や小坊主達は何やら別件でてんやわんやで、高松屋を相手できる者がいない。そこでお茶出しと暫しの雑談を引き受けたのが光太郎で、その短いやり取りの中で二人は彼を気に入る、後日改めて、光太郎本人に会いに來たという。そこで光太郎はひとつ嘘を吐いた。曰く、此度の火事にて、自分の家族は皆焼け死んだのだと。それを聞いた夫妻は、自分達の子にならないかと誘つたのだつた。

「養子にならないかという申し出を受けるのに、流石に良心の呵責はあつた。だがそれでも、あの母の下にいることは耐えられなかつた。目の前に差し出された救いの手に、思わず縋つてしまつたんだ」

光太郎の語氣は、後悔の滲んだ、それでいて決して

弱々しくはないものだった。逃げた己を受け止めているからだろうか、ならば自分がどうこう言うことではなからうと思ひ、そうでしたか、とお豊はなるたけ抑揚のない声で頷いた。

しかし、今の話が一体何だというのだろう、と彼女は内心小首を傾げる。彼が高松屋の実子でないことと、今日の不可思議な様子との間に、どんな因果があるというのか。

それをどう問うか言葉を選ぼうとすると、光太郎は察したように微笑んだ、が、その笑みにはどこか影が差していた。

「それで、だ。ここからが本題になる。私はあの二人に、実の母は死んだと嘘を吐いてここにいる。だが、本当のところはどうだか分からない。火事から逃れて、妹を扱き使いながら生きているかもしれない。これまでその事を考えなかった訳ではないし、むしろ少なからず恐れていたことだった。いつの日かふらりと私の目の前に現れて、この幸せを壊してしまうのではないかとね。だが初めの頃は店のことを覚えるのに手一杯でそれどころではなかった。そのまま何年も経つうちに、次第にそれは杞憂ではないかと思えるようになってきた。あの母が自分を捜しに来るならもっと早くに見つけ出しているだろうし、それがないのであれば、恐らくはあの日はた

またま家にいて、あの火事に巻き込まれたのに違ひないと思つた。しかし、此度お前が私の子を身籠つて、ふと思つたんだ。もし、もしも、万が一。母が生きていて、しかし何らかの理由で今日まで私を見つけられないでいて、更にはどのようにしてか今、私を見つけ出したとして。母は私を取り返そうと躍起になるだろう。否、それだけでは飽き足らず、生まれてくる子をも奪おうとするに違ひない。あの人はそういう人だ。そう思つたら居ても立つてもいられなくなつて、こつそり調べていたんだ。母があゝの火事で生き残つたのかどうか。生きていたのなら、今どこでどうしているのか」

調べる内容が内容だったものだから、下手に人を使う訳にいかなくつた。ある程度は自力で頑張つたが、何人か信頼のおける人にも手を貸してくれるよう頼み、母の足跡を辿つた。その答えが今日、明らかになつたのだという。

「それで……」

「ああ。母は、十五年前に亡くなつていた」

その言葉を聞いて、お豊はどこかほつとしてゐる自分に気づいた。顔も知らぬ女が大昔に死んでいたと聞いて胸を撫で下ろすなんてと、せめて光太郎には悟られないように唇を引き結ぶ。

「火事では母も妹も無事だったんだそうだ。だがやは

り、父に頼りきりだったこともあるのか、その後の生計を立てられなかつたらしい。火事から一年するかしらないかの頃、深川の長屋で母は息を引き取つたそうだ」

「……え」

吐息と大差ない微かな声に、光太郎は気づかなかつたらしい。だがお豊は顔には出さないものの、はて、深川の長屋、と心の内で密かに首を傾げる。無論、深川に長屋くらいいくらかもある筈だし、光太郎の母がそこに住んでいたことにおかしな点はこれといつてない。だが何か、引つ掛かつた。

廊にいた頃の知り合いに誰か深川に縁のある者でもいたろうかと思うが、桐屋に来るようなお大尽に、長屋暮らしの者がいるはずもない。だが朋輩達のことでもなかつたと思うし、さりとて近頃深川の長屋の話など聞いたような気もしない。随分と昔、埃をかぶるくらい古い古い聞き覚え。果たしてどこで聞いたのだったか。

光太郎はそんなお豊の胸の内など知らぬげに続けた。

「母を亡くしてのち、妹は父方の遠い親戚に引き取られたらしい。畑の手伝いをしていたらしいが、やはり妹の方も引き取られて一年余りで、病で死んだのだそうだ」
妹には可哀想なことをしたと思う、という言葉に偽りはないのだろうと思いつつ、光太郎はとにかく母が死んでいてほつとしてゐるのだろうな、とお豊は見取つ

た。自分とどこか似通つたところのある彼のことだ。真の母の死は悼むべきことと知りつつ、今を邪魔されずに済んだと少なからず安堵していて、更にはそんな己を責める気持ちがある中で、縋り交ぜになっているのだろう。それを咎める気はお豊にはない。死んでいて良かったと思つている時点でお豊もまた他人をとやかく言える立場になかつたこともあるが、それ以上に今、彼女の胸の中には別のものが渦巻いていたからであつた。

(……何だろうか、この気持ち)

父に母に、息子一人娘一人という一家と聞いた時から、ほう、と思つてはいた。賑々しい所ではないが一応は江戸のどこかという住まいにも、何か重なるところはあつた。母は父を尻に敷いていたし、火事で死んだ父の骸は、家の近所から、兄と思しき少年の亡骸と共に見つかつたと聞いた。母は十六年前の火事から一年後に亡くなり、自分は父の遠縁の者の世話になつた。

ただ、自分は死んでなどいないし、父が入り婿だつたかどうか覚えてない。深川の長屋に引つ掛かるのも、単なる気のせいかもしれない。それに江戸は火事が多い。お豊が吉原にいた十四年の歳月の中でも、江戸では大火が一度、こまごまとした火事ならたくさん起きてゐるし、吉原自体、全焼とは言われないが何度か焼けた。

よくある話だ。よくある話。

「……その、あなた……」

「うん、何だいお豊」

それでもわざわざ問うてしまったのは、違うという確証が欲しかったからか。

「……あなたの名前は、元から光太郎だったのですか」

初めて会った時から何故か妙に気があって、時折考えていることさえ重なつて、挙句の果てには生い立ちまで似ているときて。この気心の知れた伴侶が、全くの赤の他人であるとき、彼の口からこの下らない杞憂をばつさり斬つて捨ててほしかったのやもしれない。

「ああ、いや。ここの養子になる時に名は少し変えたよ。元の名は孝太。あまりがらつと変わると慣れないだろうからと、前の名残を留めた名にしたんだ」

孝太。舌の上でその名を転がす。いやにしっくりくるのが、お豊の肌を粟立たせる。自分は白沢から初めて光太郎の名を聞いた時にどう思ったのだったか。

懐かしいと、思ったのではなかったか。

(否、そんな訳がない)

単なる思い過ぎだ。初産で、風邪気味で、少し気が立っているから、些細なことが何でもかんでも気になつて仕方なくなっているだけだ。そう己に言い聞かせつつ、お豊はもうひとつ、もうひとつだけと内心言い訳し、光太郎に再度問う。

「……では、あなたの、本当のおっかさんと、妹さんの名は……」

憶えていない。ころころと四度も名が変わつて、今ではお豊にすっかり取つて代わられてしまった自分の名は、もう最初が何であつたかなど思い出せやしない。母の名だつて曖昧なものだ。この頭の片隅に霞掛かりながらひつそりと佇む名と合致する筈がない。

ただ一言、彼がまるで聞き覚えのない名を挙げれば、この胸や胃の辺りに居座る不愉快な靄が取り払われるのだ。

そう思ったのに。

「母の名はお吉きち。妹の名は、お芳よしだ」

胃の腑がぐつとせり上がつて、ぼだぼだぼだ、とその中身が膳の上におちまけられた。食べたばかりの夕餉が再び皿の上に広がる。噛み砕いただけでほとんど溶けていない飲み込みたてのそれらは酸い臭いもさほどせず、舌の上を通る時にした味は、口から零さなければもう一度飲み下せそうなほどだった。

「お、お豊、お豊。大丈夫かい。誰か。誰か、白沢先生を」

光太郎が己の膳を蹴散らすようにして寄つてきて、肩を擦つてくれながら声を張り上げる。その間にも、お豊は総身の震えが止まらず、光太郎の手から逃げるように

して己の身体を縮こまらせた。

(嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ)

憶えていなかったのに。忘れていた筈だったのに。それはあまりに呆気なく、お豊の中の欠けていたどこかにすんと収まって、立ち込めていた霞を吹き飛ばした。

「今白沢先生を呼びにやらせたからね。ああ、苦しいかいお豊、まだ吐きそうかい」

当たり前だ、と叫び出しそうになるのを必死に堪えて、お豊は腹を抱えるように身体を折る。背中を擦り耳元で声をかけてくる光太郎から、少しでも間を置きたかったから。しかしそれは叶わず、光太郎は妻を包み込むようにして、懸命に声を掛け続けてきた。

「悪阻つわりだろうか……近頃は治まっていたようだったのに」

悪阻。その言葉を聞いて、お豊ははっと、己が守り抱えるようにして押さえていた、腹の中にあるものごとを思い出した。

どうしよう。どうしようどうしようどうしよう。お豊は再び襲い来る強烈な吐き気と戦いながら考える。あと半年もすれば生まれてくる筈のこの子は、紛れもなくこの男の、光太郎との子供であるというのに。

(嗚呼)

ぼたり、と大粒の涙が零れ、目尻を冷やかな風が撫ぜ

た。

冬がもう、すぐそこまで来ている。

—かがわ・りほこ 2015年度卒業生—